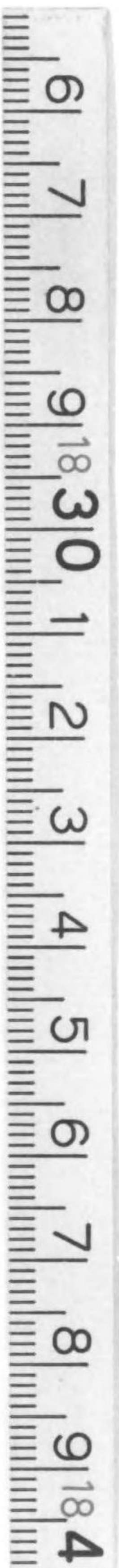


352  
942



始





特 225  
234

納本



喜久短歌會第三歌集

福岡縣小倉高等女學校





職員集

目次

旅の歌……………長澤由之(三)  
 萬華鏡……………井本二雄(四)  
 母の死……………徳永定壽(五)  
 山禽……………松隈生雄(六)  
 蝙蝠……………鈴木三七子(七)  
 風師山遠足……………松尾恒二(八)

研究科集

中村愛子(三)  
 久保ゆきの(四)  
 内藤ふじみ(三)  
 占部敦子(四)

四年集 (五十韻順)

赤染美智子(七)  
 妹尾和子(七)  
 岩尾愛子(八)



原 ッメ (豊)  
 錦戸 マユミ (四)  
 土肥 久子 (四)  
 豊田 和代 (四)  
 千々和 ミツ子 (四)  
 小幡 道子 (五)  
 大路 ひさ子 (五)  
 和田 富貴恵 (五)  
 加生 操 (五)  
 川原 とみよ (五)  
 田仲 芳子 (六)  
 竹下 静江 (六)  
 高橋 早苗 (六)  
 坪井 富士恵 (六)  
 塚本 時子 (六)  
 中村 茂登子 (六)  
 村上 八重 (六)  
 浦上 とき子 (六)

長谷川 千里 (豊)  
 都甲 千代子 (豊)  
 登本 壽々子 (四)  
 富永 愛子 (四)  
 太田 政子 (四)  
 小川 澄子 (五)  
 大和田 節子 (五)  
 渡邊 信子 (五)  
 河村 壽子 (五)  
 川上 綾子 (五)  
 武田 千鶴子 (六)  
 高木 千枝子 (六)  
 田中 美穂子 (六)  
 坪根 博子 (六)  
 長井 ユクエ (六)  
 長畑 弘子 (六)  
 武藤 千代子 (六)  
 臼木 淑子 (六)

丹生 清子 (四)  
 堀岡 清子 (四)  
 富田 咲子 (四)  
 禿河 富美枝 (四)  
 奥 久子 (五)  
 大西 子エ子 (五)  
 和田 ウメ子 (五)  
 川浪 ウメ子 (五)  
 鐘ヶ江 幸子 (五)  
 吉田 穂枝 (五)  
 田澤 富美子 (六)  
 武谷 安代 (六)  
 田中 利恵 (六)  
 土谷 貞子 (六)  
 中島 澄子 (六)  
 村田 榮子 (六)  
 村上 豊子 (六)  
 上村 子トセ (六)

### 三年集

(いろは順)

兎洞 ユキ子 (六)  
 北澤 和代 (六)  
 草野 秀子 (三)  
 佐藤 愛子 (三)  
 住吉 重子 (三)  
 内藤 静子 (三)  
 永見 行恵 (三)  
 長谷川 貞子 (元)  
 古田 久代 (三)  
 水野 花子 (三)  
 吉元 まさい (三)

桶川 惠美子 (元)  
 北島 マサ子 (三)  
 後藤 シゲ (三)  
 佐野 千鶴子 (三)  
 田中 百合子 (三)  
 奈須 ヨシエ (三)  
 野村 美智子 (三)  
 東 百合子 (元)  
 丸橋 きよ子 (三)  
 村上 ツギコ (三)  
 渡邊 ふみ子 (三)

沖村 スミ子 (元)  
 木村 照子 (三)  
 佐脇 幹子 (三)  
 白石 暢子 (三)  
 津田 朗子 (三)  
 中村 智子 (三)  
 延吉 静子 (三)  
 深澤 光子 (三)  
 水之江 満珠枝 (三)  
 山田 陽子 (三)

井上 慶子 (三)  
 岩松 文子 (三)  
 一丸 葉子 (四)  
 石井 清榮子 (四)

市川 美佐子 (三)  
 岩松 善子 (元)  
 稻田 政子 (四)  
 井上 スズカ (四)

伊木 和子 (三)  
 岩崎 博子 (元)  
 井上 ミツ (四)  
 井上 安子 (四)



- 進來泰子 (二〇)  
 鈴木壽子 (二六)  
 澤野和子 (二七)  
 佐藤惠美子 (二五)  
 相良幸子 (二四)  
 小林千枝 (二三)  
 切明笑子 (二二)  
 金子千代子 (一九)  
 海津美代子 (二八)  
 岡田房子 (二六)  
 尾石スエ (二五)  
 上村美智代 (二二)  
 浮洲彌生 (二三)  
 井澤信子 (二〇)  
 朝倉峯子 (九)
- 荒木昌子 (九)  
 伊藤好子 (二〇)  
 内田イトエ (二〇)  
 浦橋武子 (二四)  
 大原玲子 (二五)  
 小野ヒサ (二七)  
 加藤惠津子 (二八)  
 川崎道子 (二〇)  
 國永たね (二二)  
 小林弘子 (二三)  
 佐川百合子 (二四)  
 佐藤小夜子 (二六)  
 四宮田セツ (二七)  
 周滿喜子 (二九)  
 高倉靖 (二〇)
- 安西豐子 (一〇)  
 今宮貞子 (二〇)  
 上田ヒサ (二五)  
 江藤ヨリ子 (二四)  
 大村恒子 (二六)  
 小野文子 (二七)  
 加藤とき子 (二九)  
 河底朝子 (二〇)  
 熊本睦子 (二三)  
 齋藤登志子 (二三)  
 佐藤明子 (二五)  
 佐成電子 (二六)  
 清水保子 (二八)  
 白石ミツ (二九)  
 高濱ヨシ子 (三三)

二年集 (五十韻順)

- 内山代美子 (七)  
 熊谷秀子 (七)  
 山本富美子 (七)  
 松本光枝 (七)  
 前田時枝 (七)  
 藤本とし (七)  
 布野イツ子 (七)  
 近藤恭子 (八)  
 江口ハマ子 (八)  
 佐野昌子 (八)  
 佐藤芳子 (八)  
 宮崎ミキ (八)  
 宮城年子 (八)  
 三村晶子 (九)  
 篠原伊摩子 (九)  
 日野ミチエ (九)  
 森節子 (九)  
 末次絹子 (九)
- 上田則子 (七)  
 八木延 (七)  
 松本ユキ子 (七)  
 松崎君子 (七)  
 前川初枝 (七)  
 藤田スミエ (六)  
 小島俊子 (九)  
 海老名玉子 (八)  
 荒木淑子 (八)  
 坂田ミツヲ (八)  
 清澄絹子 (八)  
 水野富士子 (八)  
 三木君子 (八)  
 城野環 (八)  
 庄崎喜久子 (九)  
 廣野満子 (九)  
 角一恵 (九)  
 山口豊子 (九)
- 野崎久子 (七)  
 八下田徳子 (七)  
 榎屋タマエ (七)  
 前田房子 (七)  
 松原久子 (七)  
 藤戸和子 (七)  
 小林清子 (八)  
 江口博子 (八)  
 有田芳子 (八)  
 佐生稻子 (八)  
 北原三津子 (八)  
 宮崎桂子 (八)  
 宮原麗子 (九)  
 志道ヨシ子 (九)  
 東美也子 (九)  
 森敏子 (九)  
 助川とき子 (九)  
 池田信子 (九)



|             |             |             |             |            |             |             |             |            |             |            |             |             |               |             |            |            |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|-------------|---------------|-------------|------------|------------|-------------|
| 渡部 都子 (一七)  | 吉田 美奈子 (一八) | 山口 米子 (一九)  | 八百 喜美子 (二〇) | 武藤 節子 (二一) | 皆吉 美恵子 (二二) | 堀部 八重子 (二三) | 福江 徹子 (二四)  | 久森 靖子 (二五) | 馬場 静子 (二六)  | 野村 文子 (二七) | 西田 保子 (二八)  | 中村 美知子 (二九) | 中村 イトノ 輝 (三〇) | 富田 輝 (三一)   | 土田 康子 (三二) | 田中 玉江 (三三) | 竹内 八重子 (三四) |
| 吉元 ナミ子 (一八) | 山田 淑子 (一九)  | 山内 富美子 (二〇) | 村田 フミ子 (二一) | 三根 明子 (二二) | 松田 和子 (二三)  | 古江 俊子 (二四)  | 平田 キリエ (二五) | 早川 恭子 (二六) | 橋上 久子 (二七)  | 糠塚 紀子 (二八) | 鍋山 美佐子 (二九) | 中村 スエ子 (三〇) | 頼入 富枝 (三一)    | 鶴田 嘉鶴子 (三二) | 田中 常盤 (三三) | 竹野 榮子 (三四) | 田代 晶子 (三五)  |
| 吉本 ミツ子 (一八) | 芳崎 和子 (一九)  | 山岡 道子 (二〇)  | 室住 千枝子 (二一) | 宮野 富子 (二二) | 松永 和子 (二三)  | 堀田 修子 (二四)  | 深田 フジエ (二五) | 久恒 富恵 (二六) | 畑間 サカエ (二七) | 野中 康子 (二八) | 西田 和子 (二九)  | 中村 ミサヲ (三〇) | 長澤 雅子 (三一)    | 戸早 久子 (三二)  | 榎上 昌子 (三三) | 田代 晶子 (三四) | 田代 晶子 (三五)  |

一年集 (いろは順)

|           |            |            |             |             |             |            |            |           |
|-----------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|------------|-----------|
| 辻 文子 (一五) | 藤谷 悦子 (一六) | 牧野 ハル (一七) | 深田 ヨシノ (一八) | 志賀 俊文子 (一九) | 松中 佐代子 (二〇) | 吉村 明子 (二一) | 小川 淑子 (二二) | 增山 愛 (二三) |
|-----------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|------------|-----------|

卷末記.....編者 (一五)



職  
員  
集



旅の歌

長澤由之

牧牛の動くと見えねいつしかに山ふところの高きに遊ぶ (九佳山四首)

ノリうつぎの花白々と咲き群れし谷にしづもる法華院の温泉

指先につまぐりてみて面白し久住山頂の苔挑の實は

陽に向ける方のみわづか赤らめる苔桃の實を食みてみたりし

廣重の描きたるまゝの構圖にて金谷の渡り見えて來にけり (懷古二首)

落日は山に入りそめぬ北齋の凱風快晴の富士の山容

うす白くこなふきてゐる柿の實を枝ごと賣りをり比叡山の道 (比叡四首)

大なる杉のはだえと交りて朱の膚色の檜のよき枝振

朱の色の太幹ゆ出たる細枝の千枝千枝に檜葉黄ばみたる

説明の僧は大なる柱に倚りて不滅の燈を指しにけり



様々の模様をなして現はるゝ萬華鏡マンカラキョウは見れどもあかす  
 萬華鏡にペン先ボタンナイフ等を置き見るがおかしきに子等にも見せつ  
 人皆の大方去りて職員室のストーブもやゝに燃えつきし如し  
 大方の話題はつきて燃え残るストーブをかこみて對ひ居にけり  
 宿直の夜をひとり食す夕飯の更科の辨當はわびしかりけり  
 宿直の夜はすべなし更くる頃を落花生など買ひ來てたうぶ  
 夜を更けて起重機の音聞こゆ大阪より今宵は船の着きたりといふ  
 船べりに立ちつゝ船頭は朝あけの海に長々といばりしにけり  
 苜りそけし稻田の果を白々と曉の海のほのあかりみゆ  
 活動館の軒下の寢覺めにルンペンの女あくびせり腕さすりつゝ

冬ながらおだひに澄める大空の明けそめぬるを母逝きませり  
 御燈明の火影は遂にくもり來てみつむる眼指うつむきにけり  
 やすらけき死のおもざしに手を合はす小さき吾子は何思ひけむ  
 父逝いて二十年を迎へつゝ母を葬りぬ十二月の八日  
十二月九日父の命日  
東蓮寺山に母を送る  
 此の山の眺めを戀ひし母なれど今日のみともはかなしかりけり  
 此の山に父母いますかとふりかへり見るまもあらず自動車速し  
 長き日をこの疊の上に病臥せしか我は坐りぬ思出つきすて  
 この日頃我家に歸りて思はずも襖を開けぬ母臥せし居間  
 垂乳根の母の手植ゑし沈丁花つほみ多くもてど未だ咲かざり  
 大空に聳え立つ松の枯枝に百舌の高啼き落着きもなくに



## 山 禽

松 隈 生 雄

山雨は又襲ひ来ぬ尾根遠く佛法僧の叫びきこゆる  
 洩れ映る日影冴えたる高枝に啄木鳥は淋しき音を立つるかな  
 淡陽さす墓地は寒けし闕伽棚に青鴨とまりてうごかざりけり  
 山峽のくれゆく小田に漏水の音かすかなり五位鶯啼き渡る  
 落穂拾ひの兒等歸り行くを見つゝあれば澤邊にふとも鶉鳴き出でぬ  
 返咲くつゝじ手に折り黄昏の森蔭行けば雉鳩鳴けり  
 昨の雨に水嵩増したる瀬を求めて背黒鶴鶴跳びつゝ鳴ける  
 返咲きし庭の李に四十雀數多群れ来てすぐ移りけり

## 蝙蝠

鈴 木 三 七 子

たまさかの日曜を幼子を連れて  
 到津動物園に行く(昭和十年十月詠草)

身のこなししなやかなれどアザラシの老人に似しその顔あはれ  
 陽あたりにぶら下りたる蝙蝠の姿はあはれ蔽ふものなし  
 土塊のころがる中にうごめける緬羊はあはれ汚れたるかも  
 カンガルーの脊かく身ぶりの何やらむ人めきてゐて愛しかりけり  
 つき山を白きうさぎがあまたるて手まりのごとく驅けて来りぬ  
 耳ふりてうさぎ走れり眞白なる山羊の子供も交りて走る  
 耳うらにはほの紅みさしつき山を驅けてゆく見ゆうさぎの群れの



## 風師山遠足

松尾恒二

(十月十九日三年生二百名の遠足あり)

風邪熱の少しありしが麓路に薄さゆらぐ山を見放くる  
 登りゆく路の傍へは山萩の花のかそけさ心惹かれつ  
 穂薄のさ揺らぐなだりにふり仰ぐ頂は大き一塊の巖  
 海の面たひらかにして汽船帆船いくつ動けり東に又西に  
 曳船の十三艘を曳きこしがやがて眼界に見えずなりたり  
 寝ころびて膚に觸れたき親しさの湧くをしも覺ゆ笹生ふる山

## 夕顔

誰もぬ家に歸れば暮れはてし闇に仄かに夕顔咲けり  
 妻子ぬ家の寂しくうとみるし夕顔の花今ぞ咲きつぐ  
 何がなと植ゑておきたる夕顔が今咲きつぐをひとり見にけり

月よみの淡き光を吸ひて咲く夕顔の花見るはさびしも

生後九箇月の嬰兒三男高

しばらくもじつとしてゐるす這ひ廻る子を追ひかくれば高聲をあぐ  
 眼ざめよくあしたは父のふところに玩具いぢりて大人しくをる  
 物につかまり立つことをやゝに覺えたり立上るすなはち皿鉢をつかむ  
 わが脊に觸るものありいつの間か這ひ寄りてきて物取るとする  
 ひたむきにきほひかゝりて物取ると挑みくる子とをれば樂しも  
 憎むべき何物もなきこのごろの子を遊ばせて爲事怠りぬ  
到津の山に散策十一月一日  
 つはぶきのかたまり咲ける庭を出でゆく山路は枯葉ふむ音  
 たまたまに一日遊びて秋山のよろしきことを云ひ云ひくだる  
 とりかぶとの花紫に色映えて咲けるは籬の外より覗く



研  
究  
科  
集



中村 愛子

稻の葉の伸びの素直さ宵月に葉末の露の一つ一つ見ゆ  
ものを聞く幼な兒の瞳眞剣に輝きてあるを見るは尊し  
何氣なく道端の草引抜きて捨てたる後に残る淋しさ  
素足にて白き緒の下駄からめかせ坂道歩く湯の街の客  
わが家の軒にかゝりし蜘蛛の巣に夜露のつきて白く光れり

内藤 ふじみ

いさゝかの野菜にあれど老人は寒風すさぶ橋の上に賣る  
寒風の吹き通し居る橋の上に野菜賣りをり買ふ人無しに  
オーバーも無くすくれて歸る子供あり破れ風とまるたんほの道を  
秋晴に山なみはるか連れり輕氣球一つ大空に浮く  
寒風の吹き通り居る田舎路は枯木枯木に鳥鳴き居り



月明り及ばぬ軒の下かけにほの白く見ゆる菊の花群  
 手に取りし薬の瓶の冷えしるくしみんゝ冬と思ふ朝なり  
 若人が歌うたひつゝ引きて行く車の音のいと軽けなり  
 久々にあたる光りが玻璃窓に溜れる塵のしるきが見ゆる  
 今年また去年の暮にもかはらざる同じ心の起る淋しさ

久保ゆきの

青白き月の光に佇みて海底に住む心地せりけり  
 いつしかに春も去りしか草苗賣る聲すがすがし青葉ごもりに  
 炊事場の片隅になくこほろぎをしみんゝと聴く長月の頃  
 笑へども心のみたぬ此の頃を如何にかすべき思ひわづらふ  
 死といふを今しみんゝと思ふなり秋雨の降るこの初七日に



赤染美智子

張り替へし障子をあけて秋晴の明るき庭を見るはたのしき  
河原にかたぶき咲ける秋草に吹く夕風は身に沁みるかも  
賣出しの旗をば立て、おどけたるチンドン屋行く年暮る、町  
亡き弟の在りし姿を夢に見し今朝の寢覺の心淋しき  
新調の服を着飾り妹は鏡に向ひほゝゑみてをり

妹尾和子

すゝかけの街路並木もいろづきぬ都の秋はうすらつめたき  
雨の夜の銀座の街のさみしさよ柳の枝に露の光りて  
沈み行く夕日がかかけの美しき富士の高嶺は紫にして  
はるかなる富士の高嶺の尊さよ七里ヶ濱に暮色たゞよふ  
待ちわびし旅行も過ぎて今はたゞ巢立ちゆく日の日ごと近づく



幾年か共に過ごせしアカシヤを今日が最後としばし眺めつ  
 木枯の吹き荒ぶ夜のおそろしさ姉はひたすら物縫ひて居り  
 やすらかに眠りつきたる妹の顔はかすかに微笑みてをり  
 物を縫ふ手を休むれば冷々と秋の氣配の感じられけり

兎洞ユキ子

新らしきこの學び舎に移り來て遠くかすめる足立山を見る  
 朝ごとに寒さつのりて道ばたの小菊の花はうら枯れてるぬ  
 小夜更けを湯に浸りるつゝ外の面なる木枯の音に聞き入りにけり  
 新しきこの學び舎の窓により古き校舎をしばし偲びぬ  
 校庭のあをぎりの幹にナイフもて我名をほりて甘き追憶

桶川惠美子

幾年を共に學びし學び舎のさ庭べで摘みし雛菊の花  
 初霜の白々と置きし此の道を白菜車挽く村の乙女子  
 いづこより漂ひ來しか菊の香徒然なればしばし嗅ぎ居り  
 傘借りに訪づれし家は灯も消えぬ暗き冷たき門に立ち居つ  
 張替へし障子の外で柿の實を數へつゝ、樂し里の家の朝

沖村スミ子

懐かしき學びの庭のアカシアの木影もいとゞあはれなり  
 亡き人の數に入りぬる友の上をそゞろ偲べり晚秋の夕  
 しぐれ降る秋の夕べを唯一人下校の途の急がるゝかな  
 友どちの投げ與へたる煎餅をみつゝ、走る小鹿愛らし  
 東の空はほのゝ、白み來て朧に見ゆる白鷺の城



苦しげに眠りし友を見守りて夕餉食さむと箸取りにけり

藍色の山々見れば我が心のわだかまり消えてさみしくなりぬ

大いなる氣持もたむと起りくる小さき心あざけりて見ぬ (修學旅行車中三首)

別れたる後のさみしさ思ひつつ裏通りを友と歩み行くなり

林近き此の家に移り來てはぜの木の眞赤き紅葉まじかくに見ぬ

北島マサ子

きゝなれぬ車輪の音にふとさめて靜かに眠る友の顔見ぬ (旅行中)

いさかひて母上の顔見上ぐれば頬のあたりは笑まひてありき

なつかしのこの學び舎を後にして新築校舎に移り來て嬉し

漱石の草枕讀みてしまらくを清き氣持に浸りて居りぬ

木枯の劇しく荒ぶ巷行く巡禮の歌哀なりけり

木村照子

夕顔の花白々し寄りそへば輕き吐息に搖るゝいとしさ

新しきインクの香り嬉しくて忘れし友に文書きにけり

在りし目を偲びてかざる寫眞うつし眞にこよなく愛でし花供へけり

冷え渡る廊下に立ちて逝く秋を素足の裏に沁々と知る

やりどなき物寂しさに菊の花手にもめばあはれ香り残れる

草野秀子

ほろ／＼と落つる涙の暖かさいさかひし後の淋しき心

のどかなる池のほとりの青柳の緑の糸に春風ぞふく

ほのほのとさぎり晴れ行く曉方に初春を告ぐる鶏こりの聲しきり

夕されば空吹く風の冷たくて秋深まりし氣配のしるき

ひとしきり降りし時雨の過ぎさりて葉蔭に光る露の美はし



みまかりし君を想へば悲しかり手向けし花のこほれ落つるも  
 山羊の子はしばし啼かずも農園の李のもとにたゝすみてあり  
 せゝらぎの清き水邊にコスモスの萬の草に交りて咲けり  
 銀色の鎌にかも似る小夜更けを中空に照る下弦の月影  
 今朝挿せし一輪挿の紅ばらをむしり摘みつゝしばし泣きたり

佐 脇 幹 子

コスモスの咲き亂れたるホームには人影のなく秋風の吹く  
 土産物買ひ整へて弟の笑顔思ひて我も微笑む  
 猿澤の柳の下で賑やかにレンズに向ふ若き乙女子  
 時雨降るビルディング街をおほき荷物右手に持ちてとほくくと歩く  
 常磐木の森靜かなり神前に我額づきて國の幸祈る

佐 藤 愛 子

銃をとりてうつろ心に立ち居れば勇ましく響く氣を付の聲  
 夕靄の濃く立ち罩めし瀬戸の海を我が乗れる船は靜かに進む  
 山々の紅葉愛でつゝ友と共に語りひながら渡月橋を渡る  
 名にし負ふ富士の高嶺を夕映の大空高く仰ぎ見にけり  
 晝の雨にうるむ銀座の街々のネオンサインを美しと思へり

佐 野 千 鶴 子

くせなれば矯めなほしてもよきものとなさんとすれどなりがたきかな  
 遠近に積み上げありし稲塚の數も少なに風さむき朝  
 あかねしてみ山は濃ゆき紫の雲たなびきて暮れて行きけり  
 初旅の旅路に聞きし言の葉の似たるなまりに見も知らぬ人 (修學旅行にて)  
 タづきし汀に立ちて砂の上に小倉とかけば波消しゆきぬ (七里ヶ濱にて)



華やかに白く明るく秋の陽は梢まばらの山に沈みつ

夕靄は靜に降りて島と水仄紫の瀬戸の海かな

金の月は宇宙の窓と誰か言ひき實にとぞ思ふ秋の中空

秋風のひよう／＼と吹く夕つ方君の棺は靜かに立ちぬ (田中幸子さんに)

交りを絶ちて一年この頃は戀しくさへも思はるゝなり

住吉重子

つれ／＼を慰めんものと病む友に心づくしの小包を送る

朝まだき歩を拾ひつゝ學舎をのぞめば靄に夢のごと見ゆ

晩秋の落葉の如く哀れにも小さきみ魂の神に召されぬ

我が好む花は薔薇ぞ彼の花よ觸るれば白き露となるらん

はかなくも逝きし我が友よ安けく眠れ神のみもとに

白石暢子

田中百合子

やう／＼に冷え行く足をこすりつゝ地圖書くひまに夜の更け行く

想ひやめて眼開けば燈臺の鈍き光は一つともれり (瀬戸内海)

七里ヶ濱に拾ひしといふ磯貝を誕生の日に友の賜ひぬ

さゝれ貝のほのかなる香を愛でつゝも終りし旅を憶ひ出だせり

唯一人夜の海見つゝいさかひて離れきし友の懐しきかな

津田明子

夕陽射すデツキに立ちてこゝたくに浮きて漂ふ海月を見たり

ほの白く萩の細葉を裏かへし夕風渡る秋の山かな (比叡山)

梳る黒髪の香のほのかにも匂ふ朝の冬の陽光よ (日記帳より)

藁草履ばた／＼ならず豆賣の聲も冷たき初冬の朝

白々と冬の光に咲き出でし山茶花の花氣高かりけり



山茶花の庭石蒼き垣ぬちにはかなく散りて秋の暮れ行く  
 絲菊のかけも冷たししも月はもの書きをれば小夜時雨する  
 いつしかに秋の深みも目に見えて山のもみぢも色まさり行く  
 拭き終へし縁にあまねく流れ入る朝の日かけに親しみにけり  
 信すとふ人の言葉を疑へりわれとわが身を信じ得ぬ身は

奈須 ヨシエ

コスモスの花咲きみだれし静かなる小さき驛を今も忘れず (修學旅行)  
 朝露に心地よきかな靴ぬらし霧薄れ行く道を急ぎぬ (登校の時)  
 懐しや姉様人形の紅き布幼き日をば思ひて縫ひぬ (妹の爲に人形衣裳を縫ふ)  
 ぬかるみに轍はまりてあえぐ馬を鞭もてたゞく馬子憎らしき  
 川の邊の小枝の鳥大きな羽搏きをして朝霧に消ゆ

内藤 静子

新らしきこの學び舎に移り来て心嬉しく今日も暮らしつ  
 氷雨降る夕暮時を唯一人小走りに行く男の子あはれ  
 初冬の空見上ぐれば柿一つ日の影あびて光り居りけり  
 ひたすらにノートの整理なし居れば小春の日影暖かに射す  
 うす日さすわがさ庭べに香高き菊に並びて小萩も咲ける

中村 智子

落葉わけ椎の實拾ふたのしさよ汗さへにじむ日曜の午後  
 庭に咲く眞白き小菊手折りては我にたまへる母の御心  
 甲板に夜風受けつゝ灯をみれば歸る我身のさらにうれしき (修學旅行)  
 はらからと共とは思へ目覺れば父母の戀しき旅の夜半かな (同)  
 悪しきとは知りつゝ母にさからひし夜の長さかなねむられずして

永見 行惠



夕づきしこの汀邊をさまよひて友偲びつゝ今日も暮らしつ  
 逝きし友のみ魂よとはに安かれと花束を捧げしぼし祈りぬ  
 人皆の寝しづまりたる眞夜中に異郷の月を一人見て居つ  
 ほの白く匂へる菊に見入りつゝ遙けくしのぶ師の君のこと  
 住みなれしこの學び舎を後にして移り行く日のそゞろ悲しき

野村美智子  
 延吉 静子

學問にひたに勵めと父母は生活ノツキのことなど我に語らず  
 青バスの中に成田の護りふだはりてありけりゆかしとみたり  
 あかね雲帆柱山を渡るとき鎌倉で見し富士を思へり  
 木枯の吹き荒びたる裏庭に南天の實の赤きがゆるゝ  
 友どちと箕島ヶ原に遊びつつ空行く雲に秋を思へり

長谷川貞子

冬來れば足立の山にほそくくと炭焼く煙の立ちのほるかな  
 久しくも咲き續きたるつまぐれも皆實となりて秋たけになり  
 木々の葉の皆枯れはてし山島に橙の實の黄色に光る  
 名残なくよべの嵐もをさまりて心すがしく文讀みにけり  
 いさかひて文も絶えにし親友を淋しくも又思ひ出すかな

東百合子

町角で亡き友に似し人を見てしばし佇み友を偲べり  
 今も猶哀婉の情を物語る青くにされる猿澤の池  
 赤々と丘を彩るハゼの葉の今朝見れば殊に美しきかな  
 學び舎の到津に移り思ひ出のあのアカシヤは如何なるらん  
 山路來て繪畫の如く美しき景色見出し愁除けり



あか／＼と日は出で初めてこゝかしこデッキに集ふ人のふえゆく  
 あたゝかき日ざしをうけて友だちとデッキに立ちぬすゝる風ふく  
 いく日ぶり星を眺めぬ歩み行く鎌倉の夜は冷たかりけり

我がどちの移りて行くを知らぬごと大空高く聳ゆるアカシヤ（校舎移轉）  
 アカシヤの變らであるを見るにつけ離れがたなの我が心かも（同）

古田 久代

心まで清く澄みたる心地せり五十鈴の川に手をきよめつゝ

夕焼に眞紅に燃えし富士の峯紫雲かゝりて海亦紅し

すめろぎのまします城の大前にぬかづき得たる今日の嬉しき

すめろぎの御陵の前にぬかづきて世に在す時の仁徳をしのべり（桃山御陵）

朝靄につゝまれるたる山の端の緑の中に朝日にほへり（瀬戸内海）

深澤 光子

丸橋 きよ子

繊細かなる我弟の性を太く強く育てゝやりたし父が性のごと

たゝに廣き格納庫の隅一人はむ山梨の味潤のなき

秋空に九三式の戦闘機輪を畫きつゝ飛び行くが見ゆ

活辯の眞似する男通りけり高下駄の音今日もさせつゝ

我が船に黒く鋭きこの布をはりて行きたし深きわがねがひ

水之江 滿珠枝

九日の旅を思へり安らかな夢を結べる友の顔みる

初めての夜汽車留まれば聲細う虫しのび鳴く名も知らぬ驛

寝ねられぬ夜は更け行きてひたばしる汽車の窓よりシグナルを見る

登りつめ返りみすれば秋の陽に照り輝ける志賀の湖

薄暗き廊下に立ちて垂乳根の母のおこせし文を讀みたり



水野 花子

幾千の我が學友と親しめるこのアカシヤと今日はわかるる  
 久しくも待ちて居たりし新校舎今日移り来て心樂しも  
 猿澤の池畔に立ちて眺むれば五輪の塔の朝靄に浮く  
 父上の心をこめし菊一輪今を盛りと咲き亂れ居り  
 春毎に若芽をふきゐしアカシヤよ來らん年も亦綠せよ

村上 ッギコ

大きな買物の荷など手に持ちて街行く人の顔寒けなり  
 わが友と或日は呼べる人なるに今は空しく亡き數に入る  
 冬ごとに霜やけの手に苦しめる友にてありき今は逝きて亡し  
 うつくしく咲き初めたる庭隅の眞白き菊の匂めでたき  
 夢に見し逝きにし友は我が前をもも言はずに過ぎ行きにけり

山田 陽子

綠濃き大内山を目のあたり拜するを得し今日の嬉しさ  
 驛に着き整列すれば背街のネオンサインは瞬きてをり(東京驛にて)  
 紀の國の祖父の下より見事なる柿送り來ぬ嬉しみて食む  
 夕暗の甲板に立ちて近々と夕映に浮ぶ屋島を見たり  
 白波の寄せては返す磯に立ち紫雲たなびく富士の嶺を仰ぐ(七里ヶ濱にて富士を見る)

吉元 まさい

いや古き校舎の歴史を語るらしアカシヤの梢空にそびえて  
 新しきこの學び舎に移り來て悔なき其の日を送らんと思へり  
 朝もやにつままれし山の美しさながめつゝ今朝も落葉ふみ行く  
 なつかしき學舎を後に新しき校舎に移る日は近まりぬ  
 花ならば白を愛づるとのたまひし君の言葉に我うなづきぬ



渡邊ふみ子

かけし水を残らず吸ひて懸崖のすく／＼伸びる土は黒かり

新しき木の香嗅ぎつつ移り來し喜などを語る乙女子

喜を共に乗せくるトラツクを持つ間のしばし物語りする (運搬の日)

校庭にごみ焼く煙眺めつつしばし佇み名残惜しめり

秋空に高く聳ゆるアカシヤの幹を撫でつゝ別れを告げぬ



井上慶子

紺碧の海にそばだつ岩山に碎くる波の雄々しかりけり  
きり立ちし岩山の高き松が枝に見知らぬ鳥の羽ばたきてをり(二首青海島にて)  
分けて持つ重き包の結び目に道邊の野菊摘みてさしたり  
新しき木の香漂ふ學舎を又めづらしく見上げけるかも  
うらゝなる秋陽にみてる窓邊には薄黄色なるカーテンそよぐ(三首校舎移轉)

市川美佐子

耳すましじつと聞入る庭さきに鈴蟲鳴きて秋近づきぬ  
絶壁の松より松へ戯るゝ小猿二匹を珍らしく見し(雲仙旅行)  
海上の小岩の上に鷺一羽われらのゆくを見つめるるなり(同前)  
日の光うけて光れる稻の穂の波だつ中に雀遊べり  
硝子戸の揺るゝを見れば淋しさのいよよ増すなり留守居する夜は



窓開けばそゞろつめたき朝の風さと吹きこみぬ小暗き室に  
 室ちかく無花果の葉のゆれゆれて硝子窓にうつる影のつめたさ  
 けたまましき百舌の聲して松が枝のさゆらぎにけり冷たき風  
 見おろせば白く光りて續きたりわが登り來し一すぢの道  
 うちなびく薄の穂波秋の陽に輝きて見ゆ山の頂 (二首風師山)

伊木和子

岩松文子

物の音なべて静けき冬の宵月影ひそかに松洩れて落つ  
 新しき着物を着ては我知らず笑顔となりて鏡に向ひぬ  
 高々と上るボールを見上ぐれば一つ一つの雲の漂ふ  
 白萩の花の上におく白露の朝の日影に輝きてをり  
 過ぎし日にいさかひせしも懐しく遠き彼方の友思ひ出す

岩松善子

スタンドの灯あかりを消して立ち上がれば微かに遠く汽車の音聞ゆ  
 空高く澄める海面に心よくクレーンの音のさえてひびける  
 移りみて中のあまりに映ゆきに何とはなしに嬉しさの湧く  
 毎朝の登校の時に鐵門の中を覗きぬ別れし家に  
 風の日スケッチしたるを思ひ出す潜り戸も今はくぐる人なし

岩崎博子

青々と四方にひろがるもみち葉の下通りけり功山寺の門  
 先生の笑に溢れしお話に友はうなづきて聞きてをりけり  
 アカシヤの葉は秋風にそよぎるてボールははずむ高き青空  
 北窓より幽かに見ゆる燈火を今宵夜ふけて獨りみつめぬ  
 高空にかゝれる雲に陽のさして畑の邊に立つわが面照す



うば玉のさ夜のみ空に輝ける星見るたびに亡き友思ふ

學び舎の窓より外を眺むれば白煙なびく煙突の見ゆ

長々と連なる山のその上に白雲浮ぶ秋晴の空

秋もはやたけなはとなりぬ築山に植ゑし小菊も花を咲かせたり

朝霧の野山を包む朝ほらけ灯また、く人家の見ゆる

稲田 政子

盆が来て墓参りらしき人々が柴を片手に持ちて通れり

ころころと大きな栗がころび出て嬉しく開くおくりものかな

おくり來し栗を眺めて我も一度山に拾ひに行きたく思ふ

後々にふり返り見むけふの口を何か記念に残さんと思ふ

新しき木の香の高き部屋々々を友と一緒に見あるきにけり

井上 ミツ

初蟬のやさしき聲に守られて靜かに眠れり父の御魂は

供へたるみ墓の花は陽をうけて低く垂れをりかよはきうなじを

學舎も今日を最後の日となりて古びし室をしみじみと見る

さらさらと青葉をなづるそよ風に白コスモスの花は散りゆく

父上の御墓に手向けしコスモスのはらはらと散る心さびしき

石井 清榮子

夕立の降りたる後の庭見ればわが植ゑおきし菊も折れたり

學舎の楽しき晝の休にも今日はさびしく母を思ひて

學舎に行く道寒き初冬の日行きかふ人は白き息はく

床の間の上に生けたる白菊の香りも高し明治節かな

秋の宵一人悲しく今は亡き舊師の恩をしみじみ思ふ



夕暮に三つ四つ見えし星の影數へもきれぬ數となりたり  
 いつの間か月の光の照りいでて面かはりしぬ企救の浦波  
 次々に田は刈られゆきその後の畦道に咲く野菊あはれに  
 名残とて校庭にあるアカシヤの一葉とり来てノートにはさむ  
 國語にて習ひし言葉さつそくに我は使ひて友に笑はる

井上 安子

待ちかねし妹の便り受取りておのゝく胸をおさへつゝ開く  
 渡月橋渡りてはるかに嵐山の紅葉したる木まだまばらなり  
 初旅の眠れぬ眼にうつりたる世界に名ある富士の嶺かな  
 別れゆく人はおのおのさざめけど無言に立てりアカシヤの木は  
 古びたる校舎をあとに別れゆく名残の涙ひとりでに落つ

原 ッ メ

赤蜻蛉あかくやけたる夕空をすいすいと二つとびさりにけり  
 澄みわたる空も裂けよと打上ぐる仕掛花火の音ものすこき  
 休日の朝の心のやすらげき目覺めし床に陽のさしてをり  
 羽切れし赤き蜻蛉の二つ三つ糸に釣られて風にそよぎるる  
 友達と共に語りしアカシヤの木蔭もたゞに懐しく見ゆ(移轉の日に)

長谷川 千里

桃色の一輪咲きし山茶花にそよ風吹けり秋の夕暮  
 生垣に一叢咲きし白菊のやさしき花に蝶とまりたり  
 久し振りに友の便りを受取りて心ときめきそつと封切る  
 庭隅に吹き倒されしコスモスの倒れしまゝに花咲かせたり  
 庭隅に一本立てる柿の木はことし始めて實を結びたり



丹生清子

何故の物たりなさやこの夕山茶花の花ちつと見てをり  
 ゆくりなくも別れし友に逢ひにけり秋もゆく日の旅の一日  
 元氣です只一行の走り書無沙汰の友よりふみよこし來ぬ  
 木の香りまだ新しき堀越えてのうぜんかづらの花咲きにけり  
 ひとときを一人静かにおくりたし小笹繁れるこの頂に  
 (風師山遠足)

錦戸マユミ

一夜さを降り續きたる雨あとの溝の泥水道にあふれたり  
 咲きいでし薄桃色の萩の花ほろほろ散りて秋深みゆく  
 大人びて心はいつか服装<sup>ふく</sup>までも氣にする我と變るかなしさ  
 幼子の無邪氣な遊を見るうちに我も昔を思ひ出しけり  
 實りたる穂は重たけに田の稻は風に吹かれてさらさらとなる

都甲千代子

枕邊に鳴く蟲の音を聞きつゝも遂うとうとと夢路たどれり  
 月冴えし庭の木蔭にしのびより鳴く蟲の音にしばし聞入る  
 町々は微風流れて雨あとの夕陽のこれる空の明るさ  
 雑木山松蟬鳴けり麓べの木蔭さがして蟲を集むる  
 物干の洗濯物に風もなく夏の眞晝の陽は照りそゝぐ

堀岡清子

濃き淡き緑の中に點々と紅の屋根交りて見ゆる  
 萬年の氷ありけり鳩の穴を皆一齊に這ひ下りにけり  
 疲れたる足を運びて登り來し道も遙に小さく見ゆる  
 普賢岳麓に下りて見返れば頂の邊に霧はかゝれり  
 (四首雲仙旅行)  
 三年を學びし校舎に生徒みな別れを告げぬ心さびしく



逆潮の渦巻く瀬戸の荒海を潮にまかれて漕ぎはしる舟  
 その昔瀬戸内海をおちて來し平家の船もここを行きしか  
 紅葉せし山の裾べの眞白なる到津橋を電車走れる  
 満員のバスより降りて新しき學び舎へゆく今朝は嬉しき  
 硝子戸に光ちろちろ揺れうつる庭の水溜に日の影さして

登本 壽々子

豊年と祖母の喜び刈る稻を幼き妹も見てよろこべり  
 重き荷を運びしことを語りつゝ家賑はしぬ夕餉のつどひに  
 舊校舎の庭に聳ゆるアカシヤは素肌の姿さびしく立てり  
 新しき學びの園の鐘の音に心あらたに勉強をする  
 名も知れぬ小さき花を見るにつけ思ひ出づるは幼かりし日

富田 咲子

海峡をこえて山路過ぎ行けば黄色の石菫の花は咲くなり  
 濱風にほゝなぶられて行き行けばいつしかおほえず汗のにじみぬ  
 タぐれの田舎の空氣ふるはせて鐘の音淋しく秋は暮れゆく  
 年を経し昔を語る學舎にわかれをつぐる心さびしさ  
 懐しき友の書きたる文見つゝその身の上をわれは氣づかふ

豊田 和代

母の手に走りくる子の前髪のふさふさとして額を打てり  
 洗濯の母の被りし手拭にとまりし蜻蛉に子はしのびよる  
 白き泡ぶく／＼立てる洗濯をぢつと見る子の睡すゝしき  
 やがて來む冬を思ひて毛絲編むまとは嬉しラヂオ聞きつゝ  
 編みあけし服を眠れる子の胸にあてがひて吾れ一人ほゝゑむ



アカシヤの木蔭に立てる友二人楽しきことを語りをるらし  
わが友は楽しく學びをらんと病の床に臥しるるわびしさ  
わが病見舞ひたまへる友人の姿まぢかに見えて嬉しく  
アカシヤの木蔭に立ちぬ我一人戯れ遊ぶ友をながめて  
友みなは楽しく走り遊べるに木蔭によりる我となりけり

富永愛子

我獨り星ふる庭に佇みて更けゆく空をうち眺めけり

禿河富美枝

星一つ瞬きそめし夕暮を子等は家路に急ぎて散りぬ

波さはぐ濱邊に立てば磯千鳥わが世とばかり波にたはむる  
晝寝せるちごの寝顔をうちまもる母の眼もとは涼しかりけり  
月影に庭に立出で蟲の音に心惹かれて更くるを知らず

千々和ミツ子

川舟に始めて乗りし幼子はもろ手たゞきて喜び居るなり  
ボン／＼と花火の音に上向きて消え行くまでも見つめをりけり  
久々におとづれ見れば叔母は居す淋しく歸る秋の夕暮  
おくんちのみやけの包ひもとけば柿の葉すしにおかゞみなりけり  
わなかけて置けどかゝらずゑさのみを取りて逃けたる鼠は憎し

太田政子

其處此處に野菊花咲く野中道黄色に枯れしいなごの跳びゆく  
木のもとの落葉の上に宿りたる蝸牛の背は霜につゝまる  
崩れたる土壁の蔭を小鼠がガサリと音たて走りかくれぬ  
秋の夜時計の音のみ聞えきて一人書をかく我を勵ます  
水色に暮れゆく古き學び舎を何とはなしにしばし見とるゝ



叱られて泣きじやくりつゝ裏門に立てる妹をのぞく母上  
 香高きライラックの花に偲び出でぬ遠き他郷に嫁ぎし恩師を  
 秋立ちて池のほとりの草叢に桔梗一もと咲出でにけり  
 行き通ふ人波くゞり病院の兄様見舞ふ起業祭の夕  
 行く處皆紅葉して鮮かに水面にうつり古歌のしのばる（高千穂峽にて）

奥 久子

小 幡 道子

夕暮の村のあなたに牛鳴きてくれゆくころの静かなるかも  
 夕飯をすまして妹と語りつゝ稲間の道を散歩するなり  
 朝まだき静けき雨に鉢植の朝顔の花濡れて光れり  
 疲れたる足を休めて父上の病みます枕べに我は語らふ  
 こほろぎのなく音に心さそはれてはらりと散りぬ柿の古き葉

小 川 澄子

水やりし植木の鉢の涼しげに光りて庭は月夜となれり  
 たまたまに袂の長き着物きて鏡の前に立てばほゝゑまる  
 川べりに釣する子らは夕陽あび水の面に影をうつせり  
 公園にあまたの人の集ひるて野球のラヂオに聴きいれるなり  
 白菊の枝を手折りて亡き兄の墓前に供ふ心さびしき

大 西 チエ子

もえ出づる若葉のほひこゝろよき野邊の小道を我一人ゆく  
 晴れし日の運動場はのどやかにバレーボールの掛聲たかき  
 すつきりと澄みたる秋の夜半の空仰けば月影冴えて美し  
 薄暗く暮れかゝりたる夕暮にさびしく立てり校庭のアカシヤ  
 新築の校舎に來れば氣も改まり鳴る鐘の音も嬉しく聞ゆ



夕立が来るらし背戸の柿の木の葉は生ぬるき風に騒けり  
 風呂上り縁に寝そべり日記書く手に心地よき石鹸の香  
 はてしなき大空遠く消えてゆく誰かの吹ける口笛の音  
 嬉しげに聲をからして樽御輿かつぎ廻れるをのこ子勇し  
 塗り立てのペンキ心地よき香してほのかに匂ふ新校舎かな

大路ひさ子

大和田節子

お悔みを再び語る客人の言葉さびしも初盆の夜  
 いさかひしまゝ別れたる友人に暑中見舞の葉書出しけり  
 叱られて淋しく背戸に出でにけり涙ふきつゝ裏山を見る  
 心なき言葉を悔いつ門を出でそつと見返る學び舎の窓  
 新しき學び舎に入り誓ひたり強く正しく進むことをば

和田ウメ子

薄暗き寢臺の上に横たはる母の横顔角立ちてをり(病院にて)  
 父上の瘦せたる顔に安心の色ほのめきて我も嬉しき  
 葉雞頭色美しく陽に映えて母の退院喜ぶごとし  
 空晴れて菊の香薫るさ庭べに鳥の二三羽樂しげに鳴く  
 窓近く小さく咲けるコスモスの一片二片さびしく散りぬ

和田富貴恵

とく起きて思はず空を見あぐるに雪間に覗く一輪の月  
 庭に出で畠の中に眼をやればもぐらの這ひしあとあざやかに  
 この空であの美はしき風景を眺めうるのも今日かぎりなり  
 三日月の仄かに照りさす細道を歌をうたひてお使ひにゆく  
 わが植ゑし畠の隅の日でり草日々絶えずして咲くは嬉しき



ひさびさに逢はざりし友と此地にてめぐり遭ひたる今朝の嬉しさ  
 眞日あつく運動場を照らしたりバレー選手の顔生々と  
 木の下の子あそびし庭の上に菊の花一輪残されてあり  
 勉強にあきてお庭をふと見れば山茶花の花眞赤に咲けり  
 何處へやら持つて行かれし三毛猫がけさはお庭に歸りきるたり

川 浪 靜

美しく澄み流れゆる水の邊にむらがり咲けり紅の花  
 田舎道そばながれゆく細みぞの庭の小砂利の透きて見ゆるも  
 黄と緑一筆おきに引きにけり山田の中の稻穂熱れそめ  
 新しき花を手向けて慕參する心もすがし日曜の朝  
 家の内靜かなりけり茶の間にてはぶさうの實をむく音きこゆ

加 生 操

白壁の塗り新しき新校舎友達の顔も輝きて見ゆ  
 舊校舎いよいよ今日はいでにけりふり返り見るアカシヤの老木  
 それぞれに己が荷物の重たきを誇りあふなり學校の引越  
 朝まだき川邊に咲ける月見草汽車の窓よりめでつつ行けり  
 車窓より眞暗き窓を眺むるに燈火のみが遠近に見ゆ

河 村 壽 子

大いなる荷物を脊に負ひながら校歌うたひて我等は行くなり (校舎移轉)  
 教室に一步這入れば新しき木の香にほひてわが胸をどる  
 秋の日を背中にうけてわが母は眞白き足袋のつぎをしてをり  
 珍らしく朝早く起き山茶花に枝移りする鳥の聲きく  
 返すべき言葉はあれど黙しるぬ我は昨に涙うがべて



あひわかればや幾年の日もゆきて思出深き山茶花の花  
 名月のすがしく射せる縁側に菊の花かけながくうつれり  
 久々に見舞ひし友の枕べにほのかに匂ふフリヂヤの花  
 なつかしき門司の港を離るれば赤間の宮も程近く見ゆ  
 すぎし日をそゞろ戀しく偲ぶなり今日訪れし門司の港よ

鐘ヶ江 幸子

川原とみよ

静かなる眞夏の午後の日盛りに風過ぎゆきて田の面揺らけり  
 夕風に波うつ稲の海のごと廣きを見れば暑さ忘るゝ  
 黄昏れて庭の繁みのをちこちに白く咲出づる夕顔の花  
 毛絲花まゝごと遊びのご馳走にいつも摘まれてあはれなりけり  
 妹は池に浮べし笹舟をいつまでとなく眺めるるかな

川上 綾子

硝子越しの庭の草木に目をやれば柘榴は二つ日に輝けり  
 見上げたる山紅葉せるその中に共樂園の門白く見ゆ  
 待ちてゐし新築校舎に移りきて心あらたに授業をうくる  
 静かなる講堂の中にひちりきの音もさびしき告別の式  
 頂の巖の上の日の丸は日本晴の空にひらめく

吉田 稔枝

ますゝきのさ中に立ちて十五夜の夜の美しさに思を馳せたり  
 寂しさのやる方なきに庭に出で蟻の巣つゝきまぎらしにけり  
 道すがら小さき子供にキャラメルを分けてやりつゝ涙ぐましき  
 湯上りのからだを窓に寄せをれば風に紛れて薔薇の香漂ふ  
 美しきカーネーションの花束よ教室中は和かさ満つ



朝日さす厨にトマトはあかあかと笹をこぼれて輝きてをり

ガーベラにアスパラガスの燃ゆるごと映えて明るき朝の教室(新校舎に移りて)

山あひの谷のせゝらぎ音冴えて泡雪のごと飛沫とぶなり

青々と茂れる松の木のもとに一塊の薑<sup>すまね</sup>咲きけり

夢のごと春の小川を見つめをれば小石のかけを目高すぎけり

武田千鶴子

そよ風に色美しき風車かるき音たてからからとまふ

無花果のうれゆくころの秋の日に赤蜻蛉の群すいすいとゆく

秋の日のうらゝに晴れし校庭にわれら楽しくバレーするなり

新校舎にはじめて通ふこのあした足どり軽く歩道をおるく

あかつきのすがしき中に一人出で庭を歩けば土の香ぞする

田澤富美子

白泡のしぶきとぼして進み行く船の中にて友と語りぬ

なつかしの思ひ出深き校庭に別れを告げむ機は近づけり

闇夜にて千々の草花見えぬどもこもりて鳴くは虫の聲かな

荷を運ぶ我等生徒は皆こぞり白エプロンに帽子かぶれり

蛭子市箆<sup>しほ</sup>あてむと思ひしにはがきごむまり塵はらひ鉛筆

竹下静江

月冴えし野の畦道をひとりゆけば草叢に鳴く鈴蟲の聲

文讀みてふと仰ぎ見る窓の外明るき月は窓にかゝれり

月にうかれて庭に出づれば靜かなる秋のけはひのいとゞ身にしむ

わが友の姉の話をきくごとに我もほしきよ一人の姉を

何となく只何となく物さびし門邊に立てば五位鷺の鳴く



釣をする人ひとりゐて海岸の秋の眞晝は靜かなるかも  
道のべの赤くなりたる柿の實を一つほしとて友と笑ひぬ  
何氣なく市場よぎれば松茸の味覺をそゝる秋の店先  
もろこしの葉末搖ける山路を歌うたひゆく遠足の日は  
別れの日近づきたれば學び舎の見るものすべて心惹かるゝ

武谷 安代

壁落ちて蔓草搦む馬小屋に晝をさびしくこほろぎの鳴く  
雀らは案山子に慣れて群れ食めり家里遠き山田の稻に  
まき水の雫垂りつゝ月見草この夕かけに花開きたり  
土手の上に秋草を食む牛の子の脊中を撫でて風わたるなり  
空想は限りなきかなおほらかにひろがる空の紺青の色

高木千枝子

高橋 早苗

明方の白雲なびく山の端に秋空染めて陽は上りきぬ  
涼しき夜机に向ひ唯ひとり今日の日誌に筆を走らす  
つはぶきの庭一面に茂りけり青き蕾は綻びそめて

雑草をふみふみ急ぐ畑中のわが足許にきらめく朝露

手に持てるその花束に麗はしくやさしき人の心知られて

(西南の生徒より本校に花束をおくらす)

田中美穂子

秋の夜時計の音をきゝながら病み臥す姉をそつと見かへる  
珍らしく共に湯に入りお祖母様の皺多き手とわが手と見くらぶ  
親達は幼き思ひ出語ります祖母の逝かれし夜の集ひに  
枕邊の時計面白く音たつる我も合せて口ずさみけり  
いたづきに臥しゐる友の便りをば幾度となくなつかしみ讀む



庭隅に赤く熟せる柿の實を小鳥きたりてついでみてもり  
 校庭に高く聳ゆるアカシヤにさらばをつけて今日は別れぬ  
 窓硝子ふとあけ放てば風師山遠くの空に聳えて見ゆる  
 日當りのよきお庭には一面にしきつめてあり莫塵むしろなど  
 新しき讀本買ひて第一頁あくる時に固き決心をしぬ

田中利恵

坪井富士恵

み山路にわけ入りゆけばほととぎす聲はこだます雲仙の山  
 外人の童集ひて楽しげにポート浮べたり白雲の池  
 こゝに聞けば麓の芝にて人の打つゴルフの球のすみで音せり (三首雲仙旅行)  
 夕づきて老松に鳴くひぐらしの聲耳に滿つ廣き庭邊に  
 嵐あとの木の葉の色もつややかに空にひととき青空の見ゆ

坪根博子

秋の日はやゝ曇りたり學舎に暗き蔭をば投げかけてをり  
 歌詠めと仰せられては我が心父母のます郷を思へり  
 アルプスの白雪ふみてすべりゆくスキーヤを見れば心はをどる (繪を見て)  
 早くより人待ち顔のプール見て胸はたかなり夏ぞまたるゝ  
 校庭のアシカヤのもとに集ひ来て名残を惜しむ秋の一時

土谷貞子

しとしとと降る秋雨の音きゝていたつきの母の聲かとまがひぬ  
 氷わる父の聲音に驚けば更けゆく秋の夜は半ばなり  
 車窓より古き校舎を見るたびに過ぎ去りし日をそゝろに思ふ  
 新しき校舎の窓より眺むれば空も野原も珍らしく見ゆ  
 「しつかり」と友の肩をばうちたゝき笑顔に送る今日の門出に



さらさらと薄をわたる風の音湯上りの身に心地よく吹く  
 秋風に吹かれて庭を掃きをればどこからともなく百舌の聲聞ゆ  
 掃除終へて残の水を花畑の小さき花にかけてやるかな  
 廣々と田は刈られたり一筋の小道に野菊は淋しく咲けり  
 窓際にもたれて月を眺むればコロコロコロとこほろぎの鳴く

塚本時子

長井ユクエ

海原に波の返すを見るごとし青田に大き風の渡れば  
 十六夜の月輝きてをり夜露ふみ兄を送りて家路たどれば  
 この山のあまり無氣味にありければわざと聲あけ友と語りぬ  
 魁けて綻び初めし紅薔薇に眞晝静けく蜂の飛び交ふ  
 落葉せしニセアカシヤの影落すその下に立ちしみじみ見上ぐ

中島澄子

何よりも家こそよけれ旅終へて母の沸かしし風呂にひたりぬ  
 その顔のちがふが如く性格もちがへど二人の親しき友あり  
 放課後の夕日あびつゝかへさには必ず眺むる花園のダリヤ  
 舟よひの我に藥をすゝめたる友の情をひたすらに謝す  
 言ひ知れぬ悔胸に有り今は唯友の心を解く思ひのみ

中村茂登子

ひとしきり時雨降りける電車道ほのゝと見の夕べのあかりに  
 戸を繰れば灯影及べる庭石に秋の夜深く注ぐ雨見ゆ  
 宵よりの時雨は朝も未だ止まず庭の隅にてこほろぎの鳴く  
 灯を消せば何處にゐしかきりゝすさやかに澄みて鳴き出でにけり  
 天心へ移るともなく移り行くいざよひの月の影しづかなり



生徒等は白き作業服身につけて四列に並び荷物運べり  
 作業服つけし生徒は元氣よく學校の移轉に精を出すなり  
 青空に高く聳えし足立山今は遙けき眺となれり  
 學校の移轉を終へて此頃は心を新に學校へゆく  
 風無きに庭の木の葉はひらひらと我が足許に散りかゝりけり

長畑 弘子  
 村田 榮子

この山を一つ越えなば懐しき祖母の家見えむ小川の傍に  
 今日も又觀音の森に遊びけりしぐるゝ蟬の聲を聞きつゝ  
 さ庭べに清く咲きたる菊の香の仄かに漂ふわが室の中  
 日の光明るく部屋に照りかへりカーネーションの赤きが眼に立つ  
 山茶花の赤き花瓣秋風にこほれて散りぬ枯葉の上に

村上 八重

ふと見れば續くホームにコスモスの可憐な姿風にゆれてる  
 車窓より見ゆる谷間に百合のまばら咲きたる姿ゆかしき  
 二階より海ながむれば海上に白き帆船のいづこにかゆく  
 無慘にも我等負けたりコスモスの小さく咲けるあのグラウンドで  
 はがみしてくやみしその口思ひ出し應援するよ我がともびとに

武藤 千代子

朝靄のおろしこめたる野の道を三人の友と學校目指す  
 學校の二階の窓により掛り見下す田の稻は早刈られたり  
 神前に額づく我の眞似をして小さき弟も共に額づく  
 校庭のアカシヤの木も黄葉して梢にのこるがさびしくも見ゆ  
 お習字のお室に入ればぶんぐと墨のにはひのにはひくるかな



金魚屋の聲も勢なき日ざかりに子等は楽しく集ひ遊べり  
 夏草の繁れる中を歩きゆくわが素足をば濡らす朝露  
 しとしと降りたる雨の夕晴れて空にまた、く星の懐し  
 我が家へ誰か来るらし蟲の音のはたりと止みてしはぶきを  
 する  
 大會を目ざして勵む選手らの陽やけし顔をたのもしく見る

村上 豊子

浦上 とき子

供へ物皆出来上り空見れば天の川白し七夕の夜  
 雨に濡れさびしく生ふる夜隅の名もなき草を我はあはれむ  
 夏の朝露に濡れつゝ、父上と蟲網さけて山路をゆく  
 夏毎に白き花咲くアカシヤと別れゆく日も近づきにけり  
 引越を終りしあとの校庭にアカシヤの木の高き梢見ゆ

白木 淑子

風強き嵐の晩に家を出てお客に行きし父を氣遣ふ  
 朝の目をまともに受けてアカシヤの枝はきらめき小鳥居鳴けり  
 大いなる望のもとに我は今學びつゝ、あり心寛くもて  
 學舎の移るとともに心さへ新になりぬ秋深むころ  
 いさかひて別れし友も憎めざり聖書讀む日は心のどけく

上村 チトセ

ぞろ／＼と這出す榮螺珍らしく買ひて歸りぬ六連島にて  
 何となく遠き昔を思ひたり島の女の米搗くを見て  
 のどやかに米搗きながら歌ひるるねえさんかぶりの島の女達  
 自動車の通る道まで見送ると従姉は荷物さけてくれたり  
 懐しきアカシヤの下で色々と話し合ひたり別れゆく日に



わが庭のダリアの花をつみにけり服もカバンも露に濡れつゝ  
 姉上の行きて寂しき朝會は左を向けば堀ばかり見ゆ  
 辻臺すべりて見むと思へどもあまりに多き小學生の群  
 秋晴の近き河べに来てみれば岸べは賑はし洗濯の人  
 夕暮を茜色さす川中に漁る人の影ぞ眞黒き

内山代美子

さゝやかに風は薄を吹きわたり精靈蜻蛉のあまた飛び交ふ  
 秋の夜蟲の鳴く音を淋しみてそぞろにめくる徒然草を  
 秋の日にアカシヤの上の白雲を眺めて和歌を考へにけり  
 朝霧の夢のごとくに包みたる山裾に浮ぶ白き教會堂  
 青空と緑の岡に圍まれて眞白き家をなかつしみ見る

上田 則子

朝まだき露おく庭に出でゆけば秋を思はすこほろぎの聲  
 一二町登りて憇ふわがそばに清き流の谷川の水  
 苦しさに耐へきれずして休む時耳に聞ゆる鳥のさへづり (二首帆柱登山)  
 をみな子は海草拾ひて立去りぬ後は靜かに小波の立つ  
 さびしさに窓により添ひ眺むれば陽はうらゝかに秋風の吹く

野崎 久子

幾久の小波に卒業生の便り見て希望に燃ゆる思は湧きぬ  
 我友の作文讀みて思はるゝ同じ年にて尊くありけり  
 歸り途に人の歌よみ尊さが胸の奥までしみこみにけり  
 まだ成らぬ新築校舎に荷を運び古き校舎の懐しさ湧く  
 西南の人挨拶に來ぬ歸りには席ゆづり合ふ電車の中に

熊谷 秀子



コバルトに空は澄みゐるて蜜蜂の羽のひゞきのかすかに聞ゆ  
 遠山に靄かゝりゐるて霧雨のしとしとと降る初秋の朝  
 蟲の聲しゆく鳴きかふ秋の夜はそよ吹く風も靜かなりけり  
 足立山遠く霞みて見ゆる朝舊き校舎の思ひ出でらる  
 妹の病重きに心痛みそつと行きては様子うかがふ

八木延

八下田徳子

雨降る日電車の窓の外見れば青田の稻に風わたりたり  
 幼時より別れるたりし祖母さまの肖像見ればいとなつかしき  
 到津に移りゆく日の近まれば今の學び舎いともなつかし  
 窓にさす朝日の光暖かに草葉の露はかがやかしけれ  
 校庭のアカシヤの木は今にははや梢も透きてさびしく見ゆる

山本富美子

ひえびえと肌寒き夜に母と子と何か語りひ錢湯にゆく  
 庭隅に咲き残りたるコスモスに秋吹く風の靜かにすぎゆく  
 さくさくと草刈る鎌の沓えし音の眞青き空にひろがりてゆく  
 老杉の茂れる林通りぬけ潮見ゆる丘に立てり妹と  
 病葉のうづ高く積れる庭隅にうす紫の煙立ちのほる

松本ユキ子

白々と湯煙流るゝ朝路を白きドレスの異人あるけり  
 頂の岩をふみしめ白々と霧のこもれる四方を見おろす (二首雲仙にて)  
 草叢の蟲の音あはれ晩秋の夜霧は白くあたりこめたり  
 兄よりの便りが来れば家中が集まり讀みて噂をし合ふ  
 荷造りを終へて一息外見れば葉落ちし梢高きアカシヤ



絶間なき参詣人の後につき塵一つなき参道をゆく

窓越しに庭を望めば柿の木の根方に咲きしつはぶきの花  
語りつゝ山路たどればかん高き百舌の聲聞ゆ秋晴の空  
秋草は今を盛りに咲きてをり我等の進む路のかたへに  
秋の背きらめく星を眺むれば儚なくなりし友の思はる

松本光枝

ばらばらと降りて木の葉をうつ音に目覺めて我は母に寄り添ふ

竹藪の繁りあひたる葉蔭より雀の覗く愛らしきかな

待ちわびしわが學舎の移轉日もいよいよ迫り心をどりぬ

生徒らにもてはやされしアカシヤも今は儚く夢となりたり

校庭の塵を集めて焼き棄つるその煙をばさびしく眺む

松崎君子

美しき御所解模様の帯締めて嫁ぎし姉をつくなく思ふ

嫁ぎ行く姉の姿をうち眺めそゝろに涙溢るゝ思ひす

大波の寄せては返す砂濱に幼き子らは波と戯る

今もなほ名残を止め變らぬは御裳川の靜けき流

雨上り青き草葉の露の玉目に輝きて美しきかな

前田房子

八月の十五夜の月上りきぬ草間に聞ゆるくつは蟲の聲

七卿の落ちきたりたる跡とへば枝垂櫻が一つあはれに

木の間吹く秋風の音も淋しけに紅葉の葉末なでて通りぬ

夢を見てはたと驚き眼を開けば前に變らず雨戸うつ雨

庭に立ち亡き姉上のこと思ふきらきら輝く星を見つめて



水汲めば釣瓶の音の井の中にこもりて響く初夏の朝  
 窓掛を洩る、光のやはらかに朝の教室物音もなし  
 山茶花の繁みの中に蜘蛛の子は細き絲かけ巢をつくり居り  
 アカシヤの木蔭に立ちて友を待つわが頬を吹く微かなる風  
 ほかしたる繪かとも思ふ朝霧の中に眠れる美しき町

前田時枝

前川初枝

夕涼みに夕顔見つ、ペランダの縁に腰かけ故郷しのぶ  
 電柱に羽を休めて雀二羽何を語るかうなづきてをり  
 姉上のるませし頃の楽しさをしのびぬ今宵も月の下にて  
 すがすがし朝の光をあびながら縁に坐りて猫と戯むる  
 ふと横をむきしわが目に只一つ主なき席の淋しくうつりぬ

松原久子

この秋を生きながらへし白き蛾の翅静かなり宵の窓邊に  
 恐ろしきその静けさに耐へずして音たて、みぬ更けしお風呂に  
 到津の校舎の硝子拭きながら舊校舎のこと互に語らふ  
 友達の墨すりながら指折りて和歌考へる顔真剣なり  
 名も知らぬ花も光に愛でられて細き手をのべ祈るがごとし

藤本とし

陽をうけて美しく照るハツ手の葉夕立すぎし庭のかたへに  
 長々の日照つゞきにこの雨を嬉しきものと外を眺めぬ  
 古びたるアカシヤの木も今日きりと思へばしばしとゞまりて見る  
 二階から二階に移る廊下出来嬉しさのあまりゆき、してみ  
 今日よりは到津と思ひとく起きて停留場に向ひ急ぎぬ



自動車のすぎゆきし路に朝鮮の女の頭の青菜ゆれをり  
 眞晝口のてり返したる上手の上を水まき車を撒きゆく  
 菜の花の咲きほころびし野の道をわれ母上と語りつゝ行く  
 青淵にいさゝかの皺立てながらつめたき風のしばし吹きたり  
 霧の夜は濱の漁船も出でぬらし眞白き帆布の今宵は見えぬ

藤戸和子

學舎と永久トキの別と思ふ時ニセアカシャも一しほ懐かし  
 父上のるまさぬ家はひつそりと音だに立てず今日も暮れゆく  
 父上の病の床を我訪へりうらゝに晴れし日曜の午後  
 叱られてそつと佇む弟の背中に淡し入日のかがやき  
 母上の心づくしの菊の花わが文机にけふも匂へり

布野イツ子

秋晴の庭で編物する友の手先見をれば面白きかな  
 朝まだき一人教室に来て見れば友なき室に菊の香れり  
 電車より外眺むれば海原に白き帆かけし船並び行く  
 秋晴や東の旅の友達トモは今日は皇居を拜みたまはん  
 わが母は夕餼の支度ととのへて子等よぶこゑす秋の夕暮

小島俊子

雨風のはけしき中にコスモスの揺れをるさまのあはれなりけり  
 一すぢの細き山路を歩みゆく美しき落葉に秋のこもれり  
 松茸をひとりひとりはなれて探しけり聞ゆるものは松風の音  
 とく起きて大谷の方へゆく道の水の流れもいと静かなり  
 待ちてゐし移轉なれども別れゆく校舎をみれば淋しき心地す



懐しき姉への便り認めて一人微笑む夏の夜更に

小林清子

待ちかねし京の姉より來し便り庭の木蔭に讀み耽るかも

姉よりの長き便りをしみじみと繰り返し讀む午後のひと時

叔母上の京都土産を手にとりて喜び溢るゝ弟の笑顔

叔母上の丹精こめし菊の花夕べの風に皆折れ伏しぬ

近藤恭子

縁に立ち素足の裏の冷たさを思ひつゝ見る白菊の花

晩秋の宵に聞入るレコードは何故かわが身にさびしく聞ゆ

秋の日の光まばゆき垣の根に夏の名残の朝顔一つ

秋深く日差明るき校庭に選手は練習に餘念なきかな

美しく毎朝咲きし朝顔も枯葉となりて秋は來にけり

海老名玉子

夏來れば三日月草の咲きてをり川邊の葎に亂れ合ひつゝ

曉に玻璃戸透して東天のあけの明星かがやくを見つ

銀色の飛沫を上げて打ち寄する渚の砂に蟹の這ひをり

夏來れば濱邊の砂にとりどりのビーチパラソル競ひ立ちをり

かさかさと音立て止まぬ七夕の竹の葉ごしに三日月の見ゆ

江口博子

梢洩る暑き光は蟬とりの小さき子等の顔に背に照る

友の聲にふと空仰けば南の方に小さき鳥の群れて飛びゆく

大木のあまた切られし山行けば木の香しきりにほひくるなり

黄昏の川のほとりをさまよへば枯れたる薄さらさらと靡く

わが行けばばつと飛立つ群雀又わが行手にふさがりにけり



江口ハマ子

黄ばむ穂を朝風さやかに吹きわたり日路の限りの山晴れにけり  
 朝な朝な母の手渡す辨當のぬくみ親しき秋とはなりぬ  
 汽車の音遠く響きても寂し我一人るて留守居する夜は  
 移轉後の新校庭に懸崖の菊美しきがわが眼をひきぬ  
 秋風を孕みて重き優勝旗われ持ちてゆく移轉する日に

荒木淑子

夕涼團扇片手に散歩する人は續けり川べりの道  
 芋の葉に溜りし白き露の玉風に揺られてころころと落つ  
 桃色と白のコスモス咲きにけり朝風そよぐ庭の木蔭に  
 白菊の高きかほりに懐しき故郷の家の庭思ひ出でぬ  
 はれやかに朝日影さす庭の木に雀集ひて囀りてをり

有田芳子

あさまだき庭に出でたる我がすそにすゝきの露の光り居るかな  
 稲の穂の重けにたれし畦路を友とつどひつ歩み行きたり  
 唐戸よりはるかに望む海の面にありし古蹟のしのぼるゝかな  
 少女等のうてるボールの音もよくさえんと聞ゆ秋の日ざしに  
 露落ちて庭のまがきのもとに咲ける名もなき草のさびしけに見ゆ

佐野昌子

茸とりに山分けゆけば日の光さして光れり笹の葉の露  
 秋晴の野路に咲きるしほの赤き萩の一叢いつか散りたり  
 新しき校舎あかくいつのまか運搬の疲忘れはてたり  
 廣らなる校舎に學ぶ嬉しさにひとりでにわれはほゝえみにけり  
 閑なき廣き校庭よりうち見れば四方の山々うるはしく見ゆ



晩秋の夜の寒さも身にしみて見上ぐる空に月青白し  
 朝空を眺めわたせば廣々と澄みたる空に星輝けり  
 厓の上に立ちて見下す海面に小波ゆるく岸にうちるる  
 青空の高く澄みたる陽の下にバレーボールをするはたのしき  
 東京の友に會ひたく來年の修學旅行待遠しかり

坂田ミサヲ

佐生 稻子

海峽の波は靜かに寄せかへし我が船は行く波にさからひて  
 讀みあきて遙かかなたの山見れば白雲一塊青空になびく  
 校庭をきれいに蒸がくほうき目を消して歩くも今日が最後ぞ(舊校舍に別る、H)  
 アカシヤの影に二とせ送りけり今移り行く馴れぬ校舍へ  
 淋しさに窓をひらきて外見れば足立山よりさす暖き日

佐藤 芳子

たわいなく遊べる兒らに秋の陽がそつとほゝ蒸む小春日の午後  
 靜かなる自習時間に我一人別れし友の面影しのぶ  
 朝早起登校の道の川つたひ流るゝ水の音を聞きつゝ  
 秋空にまたゝく星の數々にひとつゝの思ひ出をよす  
 菊の香の高くこもれる部屋々々にはや冬の日もおとづるるなり

清澄 絹子

廣らなる運動場には人もるすそこかしこには木片ちらばる  
 秋風にさやかに揺るゝコスモスに赤き蜻蛉のとまりて憇ふ  
 軍神のみ靈はとはにしづまれる社の前に額づき祈る  
 新しき木の香嬉しき新校舍皆たのしげに見廻りあるく  
 新しき露天廊下の珍らしく人々集ひたのしく語る



そよ風に揺らぎさやぎて校庭の木の葉は白き葉裏見せをり  
 コバルトの空を流るゝ白雲よ遠き地にある友も見らむ  
 樂しみもはた悲しみも睦びにし友ども惚ぶよすがとなりぬ  
 しのびよる冬のけはひの目に見えてあした夕べの風ぞ身にしむ  
 夕日さすわが家の庭の水仙は日ごと育ちて冬深みゆく

宮崎ミキ

忘れぬわがなげかびも垂乳根の母の言葉の厚き情に  
 黄昏の果なき野邊に祈りたり別れし友に幸あれかしと  
 砂濱を戯れながら歸りゆく童の顔の黒く光れり  
 死せるごと眠れる犬の大腹の時々動く晝の静けさ  
 新しき麥葉帽の一群の街道をゆく初夏の晝

水野富士子

蟲の音のふと鳴き止める静けさにベン音のみさやかにひやく  
 秋風の吹きくるたびにはらはらとアカシヤの葉はさびしく落つる  
 歴史あるこの學舎へ通ふのもあと一日と思へばさびし  
 運搬を了へて見上ぐる夕空に鳥が一羽飛びかへりゆく  
 燈火の下にて縫はるゝ母上のひび切れし手のいたいたしく見ゆ

宮崎桂子

移轉せし友の手紙を読みながら過ぎし昔を懐しく思ふ  
 さむざむと野分の吹きて夕されば櫛の實とりも歸りゆくなり  
 リウマチに良き薬とか聞く中將湯の香ほのほの膚にまつはる  
 つぶらなる葡萄を盛りし硝子器に夕べ冷たき秋風ぞ這ふ  
 病める身の友は厭はでいそいと茶菓などすゝむる心身にしむ



病みつきで四年の間床に就き瘦せ衰へし父の姿よ  
 付きそへば病衰へし父上に思はずしらす涙出でくる  
 今は亡き父上思ふ事ばかり生前の様目の前に見ゆ  
 今は亡き父の御靈にぬかづきて涙ながらに焼香を捧ぐ  
 父上とともに行きたる門司の街のたのしかりしを我は忘れず

三木君子

黄昏の道をたどりてこつこつと病の友の家を訪ぬる  
 運動に疲れし足を引ずりて夕暮の道急ぎゆくなり  
 戸を繰れば庭は眞白に霜おきてくれゆく秋の思はれにけり  
 お針する母の肩などたゞきつゝ日なたほこする日曜樂し  
 アカシヤの枝を透して青空はすきて見ゆるなりくれゆく秋空

宮原麗子

よき歌を作らむものと火鉢の灰かきませるつゝ考を練る  
 素足にてひたひた音たて歩みゆく廊下つめたく快き朝  
 ばらばらと白き姿が散らばりて共に嬉しげに辨當開く  
 萩や野菊美しく咲きて腰下すところさがして我迷ひけり  
 愛らしき野菊をとりて一輪を胸につくればほのかな香す

三村晶子

風やみて今期は静けき中庭の山吹の花咲きなだれたり  
 新聞を見ながら思ふ人とせし約束一つ今日はあるなり  
 新しき木の香漂ふ學舎の中にはいれば心新なり  
 選手らの勇しき姿じつと見て我も思はず拍手しにけり  
 新聞の記事を読みふと見ればわが校のこと嬉しくも見ゆ



夕つ方母と語らふ砂の上足浸しゆく潮のつめたさ  
 背戸山の木がくれに見ゆる夕月をひとり仰ぎて戸を繰りかねつ  
 風立ちて雨晴れあがる街道はまだらに乾き夕ぐれにけり  
 數多く蕾もちたる冬牡丹霜よけの傘を父は立てたり  
 うらゝ日に庭に出できて霜よけの傘がをかすと母と語りぬ

志道ヨシ子

限りなき芝生に續くゴルフ場に外人四人戯れてをり  
 島原をさして下りゆく細道に一尺程の稻の生ひ立つ  
 二重三重山に圍まれたる雲仙に赤青屋根のホテルは見ゆる  
 眞暗き海續きたる海峡に燈臺の灯は消えぬ光りぬ  
 黄昏に我庭に出で秋茄子の葉枯れし莖を引き抜きにけり

篠原伊摩子

朝まだき人氣少き往來に大根賣の長くつづけり  
 年古りしアカシヤの木に別れゆく雲なく晴れし秋のひと日に  
 裏庭の夏橙も色づきて早この年の秋も深みぬ  
 様々の友の便を取出し一人留守居の淋しきまぎらす  
 曾祖父の愛でにし松の盆栽を手入する祖父の姿うれしき

庄崎喜久子

はしやぎつゝ汽車辨當を食べにけりまだ十一時すこし過ぎしに  
 雲仙の旅行に用ふる手かばんの荷物幾度もつめかへて見る  
 草叢の山百合の蕾手折りつゝ行けば牧場も近くなりたり  
 笹舟の流るゝ方を眺めつゝ男の子らはざはめきてをり  
 疲れたる足休めつゝ友達へ雲仙の様いそいと書く



東 美也子

朝霧を廣き野原を工場のサイレン高くわたりて明けぬ  
 ねすみ色のペンキにうつるカーネーションやさしくゆる、靜かなる室に  
 雨上り獨り二階の欄干にもたれ眺むる黄昏の町  
 姉妹の成績品をいちいちに壁にはりては勵ます母上  
 大阪へ行かれし父のお土産の噂をしつゝ、弟は寝る

日野ミチエ

亡き父の御墓にあけし線香の香り靜けく邊にみたり  
 三人の祖母になりたる母上の頭の白髪目に立ちて見ゆ  
 學校より歸りて見れば病む友の癒えしと言ひて訪れてあり  
 神主の笛の音淋しく講堂に響きて今は別れとなりぬ (告別式の日)  
 友達と言ひあらそひし自らの心狭きを今悔いて居り

廣野満子

一日の荷運び終へて歸りゆく頬に冷たく秋の風吹く  
 昨日まで徒歩で通ひし河べりの砂津の校舎を懐しく見る  
 振返りて梢見上ぐればアカシヤの枯葉一ひら寂しく散りぬ  
 新しき黑板に書く先生の字まで眞白く美しく見ゆ  
 森に浮べる女學院の講堂の眞白きを無蓋廊下に佇み眺む

森 敏子

木の香にほふ學舎に移る日も近く古き校舎のスケッチをする  
 新しき校舎に向ふ田圃路とんびの群のむらがりてゆく  
 リンリンとまことあはれな鳴聲でわが窓の邊にこほろぎの鳴く  
 とく起きて木の葉の庭に箒目を眞直に入るゝ朝のたのしさ

珍らしや白き鳥かささぎがすぎにけり佐賀の青田を汽車走りゆく (かささぎを見て)



森 節 子

さらばよと別れを告げて學び舎を振り返りつゝ名残惜しみぬ  
 ひえびえと夜の大氣をふくみたる野道さびしく歩みゆく影  
 晩秋の黄昏迫る縁先に羽すほめたる蟲のなきがら  
 秋の夜に靜かに聞ゆる琴の音をペンを休めてじつときゝいる  
 雨降りし後見渡せばしほらしくうなだれてをり庭の花萩

角 一 恵

純白のユニホーム姿勇しくボールは跳るよ秋晴の空に  
 バスケットのはげしき練習に疲れはて雀の群をしばし見送る  
 コスモスの揺ぐも見えて秋の夜の露おきし庭に月はさやけき  
 秋風の冷ゆる夕べのコートの隅に我等集ひて話にふける  
 軒と軒張りつらねたる旗の下ふり仰ぎつゝ子らは通れり (起業祭)

助川とき子

靜けさを破りて告ぐる鳥の聲寢ざめの耳にふと聞えたり  
 わが庭の花は絶えたり只一つ黄菊の咲ける姿ぞあはれ  
 手をかくる人なき庭の淋しさよ落葉積りて草の生立つ  
 懐しき古き校舎に歸りくればわが故郷にきたる心地す  
 諸道具を運び終へたる學び舎はアカシヤの下にさびしけに立つ

末次 絹子

風師山ドライブ道の長々と續きて見ゆる嶺のつゞきに  
 曉の空に残れる朧月淡くなりつゝ夜は明けにけり  
 新築は嬉しけれども住み馴れし此學び舎の名残惜しきも  
 新しく移れる校舎廣々と皆の顔まで明るく見ゆる  
 黒板に白く浮き立つ白墨の色の美し明るき教室



山口 豊子

萩の花散りはてしよりいとゞしく露おきまさる庭の白菊  
 わが庭の櫻の落葉數添ひてひと朝ごとに秋は深まる  
 わが庭の萩の下葉も色づきてはやおきそめし露のきらめく  
 萩の葉に宿れる露はやはらかき秋の日ざしにきらめきて見ゆ  
 寢床よりふと見し縁の障子にも秋の日影のさしこみてをり

池田 信子

幼子の目さめて泣けば若き母夢を見しかと添乳してをり  
 母の手にやすけく眠る幼子は夢を見るにか笑みてゐるなり  
 夢のやう過ぎし月日をかへりみて行く年をしむ年の暮なり  
 師と吾といとなつかしく語りぬし夢の惜しくもさめにけるかな  
 暮れてゆく年はせまりて商人の物賣る聲も忙しけなり



朝倉峯子

やはらかに新芽出したる鉢を見てわれは喜びに満ちあふれたり  
しん／＼と更けゆく夜のしづけさにあはれに響くチャルメラの音  
弟は遠足ときゝて満天の星ちりばめし空を見るかな  
青空にくつきり浮ぶ柿の實のいづこの家にも紅く輝く  
琴の音にきゝ入りしわれいつしかと楽しき夢路たどりけるかな

荒木昌子

秋の月こすゑをこして来る風の光と共に肌にしむなり  
秋の夜半かまど近くに鳴く虫も歌の題とて選ばるゝなり  
秋の日の運動會の催しは兒童の面をほがらかにする  
父上のいまさぬ時のさびしさよ楽しき夜も無言ですごす  
朝早く工場の前を我は行くはや煙突は黒煙を出す



朝露の中を親しき友どちとわれは急ぎゆく登校の道

安西 豊子

自習時間われを忘れて叫ぶこゑあたりに散りてさまたけとなる

ぬかるみを幼き姉妹手をとりにて助けあひつゝ露路へ消えゆく

わが部屋の机上の花瓶眺むればつほみ抱きてやさしき薔薇あり

新調の洋服を着て妹はをどり廻つてよろこんでゐる

井澤 信子

お神樂を聞きつゝ心澄み渡り清淨の國に生れし幸思ふ

物音はよくきくものぞ雨音も種々の音より成立てるものを

病にて體は床に横たへつゝ心は遠く秋空の下

病にて醫師の下への道すがら健康の人見て涙おとしぬ

今年まで我等語らひしアカシヤの下に明日は誰の語らふ

伊藤 好子

秋の日にくるふ小さき赤ダリアボンボンダリアの名も可愛らし

秋來り庭のすみの蒔柿に夕日あたりて赤く光りぬ

秋空に國旗たなびく明治節祝へやうれしき今日のよき日を

雨上り姉とお湯に出かければ水ために見る秋の夜の月

えんがはで椅子に腰かけ地を見れば月の光に松の影濃し

今宮 貞子

道々にキャラメルの包紙落ちてゐぬ長き列つゞく遠足の日は

久々に語りし友に何かしらへだゝりあるがうら淋しかり

街の子のまりつき歌を耳にして幼きころをふと思ひ出ぬ

秋の日のゆるゝ川面につと投げし小石に散れり小魚の群は

あばらの骨見ゆれど祖母は近頃は太分肥えたと淋しく宣ふ



美しきリズムにつれてわれもまたあやぶみながらステップを踏む  
 獨り居の秋の夜長に倦むわれにやさしき光投ぐる月かけ  
 大空のをちこちに見ゆる白雲のすきよりのぞく日の光かな  
 七卿の眠り給へる碑の前にわれぬかづきて昔をしのぶ  
 風呂敷を背負ふ姿は越中の樂賣りにもよく似たるかな

内田 イトエ

寒月のしづかに照れる水の面に山茶花の花影をうつせり  
 秋風に葉おちつくしし校庭のアカシヤの木に細雨をほ降る  
 石垣の枯れたるつたの葉にまじりさびしく咲ける一本のばら  
 梧桐の青きその葉も色づきぬ冬の近きを示す如くに  
 花さしに新らしき花さしかへて机の上をかざるうれしさ

上田 ヒサ

瞳冴え眠れぬ夜半に庭に出で仰ぎて見たる秋の月かな  
 美しき月の光のその中に友を呼合ふこほろぎの聲  
 歩み行く黄昏初めし海原に片帆暮れ行く紅の空  
 秋更けぬ夜業する手をしばし置き淋しく戸をうつ雨に聞入る  
 學舎をうつる我等のどよめきにかゝはりもなく秋はすぎ去りぬ

上村 美智子

秋の日も早暮れかゝり山の端に茜の雲のたゞよひて居り  
 庭すみに一もと咲きし石露の花秋のあはれを深く感じぬ  
 常々はさほど感じぬ母の恩病める今日こそ深く感すれ  
 だめなりと諦めつゝも我が心やはり汽車にとむけられにけり(友を迎へにゆきて)  
 ひさしく手傳ひせむと母上のたすきを掛けて一人ほゝゑむ



いついつと兄の休暇を待ちかねて庭の白菊眞盛となる  
 みづみづし雨上りたる草の葉はうるほひ満ちてこほるゝばかり  
 いついつと待ちわびてるし學舎の移轉も眞近にせまれるを見る  
 樂しみは圍める晝食賑やかに菓子出し合つて食べる時かな  
 冴え渡る秋の月見て思ふには清きその様心に持ちたし

浦橋 武子

江藤 ヨリ子

學び舎の花壇に咲きし菊の花風にゆられてほのかに匂ふ  
 たのしみはわが手に育ちし草花の小さきながら蕾もつとき  
 朝露のしつとり置いた高原のうす紫のりんだうの花  
 年毎に學びの友の數増して今日の歴史を見るぞうれしき  
 名にし負ふわが學び舎のアカシヤは年經るごとに榮えゆくなり

尾石 スエ

目をそらし外眺むればアカシヤの氣高き姿秋空に聳ゆ  
 二年を日毎眺めしアカシヤと別るゝ時は既に來りぬ  
 登りつめ汗ぬぐひつゝ水筒の水飲みをれば涼しき風吹く  
 新しく水を汲みかへ飲みたれば氣持よきほど冷たかりけり  
 遠足に水筒忘れわが友にもらひし水のうまさ忘れず

大原 玲子

部屋に置く高き花臺をさがしけり懸崖菊の枝の長きに  
 神宮に行きし選手に幸あれと我は祈りぬ神の御前に  
 電車降りて長府の街を過ぎ行けば秋晴れの日に木々は光れり  
 赤き柿枝に残して秋深し長府の町の寂かなるかな  
 赤間宮楠の木いたく年ふりて壽永の秋を偲ばるゝかな



秋の夜はなつかしきかな親子みな机合せて文を読みける  
わが讀めば弟も負けじと大聲をはり上げて讀む秋の宵かな  
京の町そゞろ歩いて涙せり大宮人の昔おもへば

裏山の松葉かきつゝふと思ふネオン輝く銀座の町を（移り来て）  
ひむがしの都なつかし別れ來しかの目思へば涙こぼるゝ

岡田 房子

夕焼に赤くほかされ美しき彼方の空に鳥ぞ飛びゆく  
長道を重き荷運ぶ生徒等の姿をかしき引越しなりけり  
吹き寄する砂のまじりし北風にしばし背をむけ頬をうつむる  
こほろぎを取りぬと言ひて走りくる弟の手にひけ動き居り  
靜かなるこの夕暮をながめつゝふと思ひたる友の面影

小野 ヒサ

とく起きて顔洗ふのも早や寒しつめたくなりたる秋の朝かな  
はてしなく澄みたるもとに日を受けて我等は笑みつゝ體操するなり  
菊香る今日のおき日を壽ぎつ東の空をおもひたり  
この菊の清く氣高きその姿大和島根の誇といはむ  
しづかなる海面に水脈を残しつゝ白き帆船の進みゆくなり

小野 文子

小春日の空青くすみて落葉せるへちまの一本木にさがりをる  
朝早く雨戸くりあけ庭見ればくち木の上に淡き霜のる  
のこりをるむつかしき宿題とく夜更け虫なく聲のさびしく聞ゆ  
秋立ちてやせほそりたるかまきりのさみしくとまる我が部屋のかべ  
かへりざきせし裏庭の櫻の木小さき淡き花のさきける



窓ごしに千草百草咲く堤に秋風音なふ小春日和  
 黄昏の鹿の啼聲あはれなり楓の一葉ゆれて落ちけり  
 けがれなき晴の出場幸あれと神の御前にぬかづきにけり  
 夢の如風にさゆらぐコスモスの美しきかな幸福の花よ  
 黄昏の池のほとりの青柳に夕月かゝりて影をおとせり

海津美代子  
 加藤惠津子

松蟲や鈴蟲馬追ひくつわ蟲あちらにすだく蟲の音  
 魚つりてかへり淋しき八時頃道にさびしき河原撫子  
 明日よりはやさしき父のましまさず今宵一夜のさびしきことよ  
 木枯の吹く音きけば冬らしきはや晩秋の暮れゆく惜しさ  
 とりぐに花壇に咲きし菊の花今日此のごろの散りゆく惜しさ

加藤とき子

校庭の塀垣づたひ見渡すと可愛く咲いた雞頭の花  
 快く涼しき風の吹く度にアカシヤの葉のはらはらと落つ  
 屋根よりも高く立ちたるアカシヤに白く残れる二つ三つの花  
 硝子越しに可愛く見ゆる傳書鳩われほゝゑみて一人眺むる  
 屋根よりも高く立ちたる松の木の上にとまりて百舌は鳴き居り

金子千代子

ひそやかに秋は更け行く一人ゐて心しづかに山を思へり  
 旅立つた四年の留守の朝會は何とも言へず淋しい氣がする  
 四年生歸り來しときわれ思ふ俄かに町に行きし如しと  
 又自習今度もまたと皆は言ふ自習の多きこの頃なるかな  
 からくと外通り行く車音に筆を休めてじつときゝ入る



新たなる學の庭にいそしみて花咲かせばや大和撫子  
暮れて行く夕日と共に學舎の想出の窓に心残るも  
袖垣の萩の下枝枯れそめて秋の名残の姿止むる  
喜びに峰の紅葉は輝きぬ君のみゆきを迎へまつりて  
そよ風に野菊の香りにほひくる足立の山の日曜の朝

川崎道子

河底朝子

うつむきて土塀のかけに日向葵の咲きてゐるかも眞晝しづけし  
板橋をどか／＼元氣に踏みならし遠足の列長く續けり  
父上の旅の話を珍らしみ夕餉の卓は賑はひにけり  
汽車を待つ待合室にやすらひて見知らぬ人と言葉かはせり  
飛行機のプロペラの音遠ざかり眞晝の空は青く澄みたり

切明笑子

秋晴れに伸び／＼としてコスモスのかわゆき姿地にうつりけり  
天高く書よむ窓におとづる、ラケットの音に心はをどる  
田舎道何處の家にも菊咲きて障子明るく秋晴れにけり  
母上と家路に急ぐ細道に月は冷たく秋更けにけり  
袷きて鏡にうつすうれしさよわが手になりしよろこびこめて

國永たね

無花果の葉もはら／＼と落ち行きて秋も次第に更けて行くなり  
紅葉にて飾られたる山門を出でんとすれば香のほひする  
自習どき校庭のアカシヤ眺むれば残りたる葉は黄色みを帯ぶ  
はら／＼と落つる木の葉の音聞けば寒さ一入身にしみ渡る  
西南の白き講堂泰然と緑の森に美しく映ゆ



秋深くいよ／＼澄める大空を二階掃きつゝ見てゐたりけり  
 妹は入學試験を目前にひかへてゐるにのんきなけり  
 大空を窓にすがりて眺むれば鳩が二三羽とびてゆくなり  
 ひそやかにおこりゆく火に見入りつゝ何時しか母を思ひ出すなり  
 寒き夜をアスファルト道かへりくるわが靴音の響き冷し

熊本 睦子

母上の山の土産は色づきし眞赤色の紅葉なりけり  
 果もなく澄みわたりたる大空を爆音高く飛行機のゆく  
 飛行機の行方見守ると上げし眼にはる／＼映る大空の色  
 露深き朝の停車場人々の影ぞほのかに浮きて見ゆるも  
 さら／＼と落葉の音のせまりくる秋靜かなる夜のひとゝき

小林 千枝

雀追ふ爲のかゞしに雀来て肩の邊に止まり居るなり  
 山の端に澄む月影を頼りにて賤の女達は稻むすぶなり  
 庭先の柿の梢に止まりてはけたゝましくももすの啼くなり  
 朝な夕な丹青こめし甲斐ありて色とり／＼に菊の花咲く  
 色とり／＼咲きほこれども菊の花白黄にまさる色あらじとぞ思ふ

小林 弘子

我が庭のうらに咲きたる菊の花今を盛りと咲きにけるかな  
 しめやかに夕日さしいる庭の面に木の葉ちりて秋は過ぎ行く  
 なにけなく頭をあけて見わたせばどこもかしこも柿のすすなり  
 秋の日に照らされながら妹と木の葉ちぎりて物語する  
 乃木の里昔のことを思ひつゝ行けば粗末なわらぶきの家

齋藤 登志子



トンネルにせまりし汽車の窓近く芒の白穂大きくなりぬ  
 うす／＼と秋の西日のぬくもりを背に覺えつゝ物語りする  
 しみ／＼と明日の別れを語りつゝ友と二人で濱をさまよふ  
 ありたけの大声あけて唄ひつゝ行く幼子の赤き頬かな  
 午後の雨細く降りしく草原にさゆらぎて咲く野菊一本

相良 幸子

佐川百合子

朝早く起出て見れば眞白に足立の山に霧はかゝれり  
 大空に高くそびえたすべり臺子供等の聲のどかに聞ゆ(長府樂園地にて)  
 心地よき湯舟の中にひたりつゝ雞の聲聞く日曜の朝  
 ちら／＼とアカシヤの葉は散りながら最後の式をかなしんでゐる  
 どつかりと石にかけたる旅人を見れば富山の藥賣りなり

佐藤 明子

師の君は未だ來まます教壇の机を見つゝ淋しくなりぬ  
 青春の此の一時が後の世の悔ともならむ幸ともならむ  
 何が爲今日學校に通ふらむたゞ無意識に足向ふなり  
 むづかしき書を手にして讀みまどふわれの姿を人如何に見む  
 一人ゐて歌作らむと思ひつゝ心まとまらず夕べとなりぬ

佐藤 惠美子

吾が生れし時より負ひしきだめかも父なき子とはなり果てにけり  
 父と呼べど答あらく安らかに熟睡せるごとき臨終なりし  
 朝夕に父が踏みたる庭土に八ツ手の花は散りこぼれたり  
 コンサイスの頁くらむと伸ばしたる指先に秋の陽はとゞきたり  
 書にあきて教室の窓ゆ仰ぎ見る目に親しもよ青き秋空



秋晴の心地すがしき我が庭に百舌鳥の來て鳴く聲は嬉しも  
 暖かき陽影のもとに幼兒と遊べば菊も笑ひこほれぬ  
 きら／＼と光り輝く朝の陽に我は靜かに頭をたれつ  
 今直に思出となる校庭のアカシヤの木のならしかしかな  
 砂原に名を書き連ねその中に別れし友の名もありにけり

佐藤小夜子

佐成 電子

手習ひつゝ今日もらひたる仲の子の鳴きはせぬかと耳をそばだつ  
 はる／＼と澄みわたりたる大空の果ては冷く山つらなれり  
 いつしかは別るゝことゝ思へども昨日今日とは思はざりけり  
 起き出でゝ下駄はく足をつめたさに思はずよりて火の子となれり  
 すゝけたる店にさみしき平家蟹とほきをしのぶ下關かや

澤野 和子

秋晴の玄海灘を見渡せば有りし日の事思ひ出しけり  
 カチカチと時計のセカンドいやに聞え明日の試験の氣に成る夜なり  
 黄ばみたる柿の葉みつゝ思ひ出しぬ日本一の陶工柿衛門  
 舊校舍別れとなれば一粒の小さき砂もなごりをしまる  
 廊下をば走るなど言はれ何がなし走つて見たくなる時もある

四宮田 セツ

煙突のたな引く煙その姿何處へ行くやしばし見送る  
 幾久見れば我が歌二つのりて居り嬉しき心我が胸にあり  
 すく／＼と延び行く我が身眺むれど兄のせいより劣るなりけり  
 晴れた日に友と遊んだあの野邊も今は悲しも家の礎  
 花がめにやさしく氣高き菊の花我はつまめり花の一ひら



豆腐屋のラッパの音の聞え来て今日の日曜もくれ行かむとす  
 同じ年のねえやと共に炊事する母のいまさぬ日曜の午後  
 たまさかの閑を見出し米をとぎ手傳をする我はうれしき  
 破れたる御寺も家も七卿の遺跡ときけばなつかしく見ゆ  
 雨止みて眞珠を落す大八ッ手靜かな庭の眞黒き土に

清水 保子

鈴木 壽子

晩秋の山々赤く色どられ青空の下にそびえてたてる  
 教室の窓にもたれて考へをればふるきまなびやうかびなつかし  
 新鮮な空氣の中に氣もあらたにはけみまなばん郷土のために  
 來年を目ざしてまなぶ妹の傍にはいつも紅茶の香  
 考査の日日一口とせまりをる考へながらまなび手につかず

周 満喜子

いさかひて詫ぶるによしなし姉の靴物かけにわが磨き居るなり  
 妹の病む日續けばありたけの人形枕べに飾りてやりぬ  
 校庭のアカシヤの色濃くなりぬ今日此のごろの空の青さよ  
 待ち侘びし遠足の日の楽しさよ友とさゞめき山舎道行く  
 風呂を焚く煙は白く匂ひつゝ色づく空にひろがりて行く

白石 ミッ

風吹けば机に坐る人形の愛らしき首振り始むるも  
 庭の木の葉は散り果てゝ秋は逝き忽ち冬のけはひとりなりぬ  
 なつかしき幼き頃のうつし繪を見る度ごとに昔偲べり  
 蟲干の衣のかけに妹はすやくゝ眠る姿愛らし  
 わが母の心づくしの辨當を笑みて持ち行く遠足の朝



進來 泰子

自動車の通れるあとに来て見れば落葉さら／＼あとを追ふなり

夜更しは止めよ／＼と叱られてやはり讀むなり夜のたのしみ

金魚らは早や夏來ぬと喜びて池の中をば泳ぎまはれり

犬ころのいたづらせしか出目金は姿かくして待てど出で來ず

美男だと歌人のほめし大佛はこれかと見れば口もとをかしき

高倉 靖

遠足の門出を祝ふものゝやうに雀さへづる秋の日和日

平家落の壇浦にも秋が來て頭を下けた稻の行列

さや／＼と海岸ばたの秋風が車中に流れ元氣をばます

秋の日にどこからとなくボン／＼とテニスの音がさやかに聞ゆ

夏中に競つて咲いた朝顔が枯れて我が家に秋は來りぬ

高濱 ヨシ子

はつとして我に返れば門司の海玩具の如く船浮ぶ見ゆ

當番の疲れ忘れて清らかになりたる教室しばし見て居り

生徒等が晝の休みを話し合ふ校庭の木のアカシヤの陰

昆虫の採集に朝の山行けば松の枝には蟬の音きこゆ

海風に吹かれつゝ行く唐戸渡に舟を待つ人眺め居りけり

竹内 八重子

園内に黄菊白菊咲けるあり一枝ほしと其處を動かす

此の佳き日垣根の菊も咲出でし御國久しく榮えましませ

松茸の豊年なりしこの秋は値段下りぬ味も下れり

久々に友の家へ來て見ればそこには友なく花の残れる

ほゝ笑は皇子御降誕のお知らせを聞きし折のその時の顔



夕空を障子ごしに眺むればふわり／＼と雲はゆきすぐ  
 枯枝にとまりてもづのちゝちゝと泣く聲風のまに／＼聞ゆ  
 たゞ一人母に別れて故里にひとりのこりて學ぶ此の身は  
 田舎みち友と二人で學舎にいそぐ時こそたのしかりけれ  
 父母のお便り見では涙するさびしき我をたれか知るべき

竹野榮子

たゞ一人留守居する夜はしみ／＼と時計の針のもどかしきかな  
 田代晶子

きまぐれに黒き蝶をば迫ひゆけばひらひら消えぬ秋空の中  
 草の間にねころび空をながむれば胸のなやみも青空に消ゆ  
 壇の浦波の色さへ一しほに蒼くみゆるぞ哀れなりける  
 新しき校舎に匂ふ菊の花今日特別に色ましてみゆ

田中玉江

歸りくる汽車の窓よりなつかしく先づ目に入りぬ町の軒並  
 書見して出でし小庭に一面の黃菊白菊咲き亂れたり  
 朝霧が空一ぱいに立ちこめて山のあたりでもすの鳴く聲  
 妹連れ母の使に行きし時俄に降りし時雨なるかな  
 妹は今日も歸りて母上に自慢に見せる甲の書方

田中常盤

古を今日のあたりしのぶかな昔懐し乃木の故郷  
 關門の潮の流れ紺色にしぶき輝く朝の光に  
 壇の浦榮華の夢にふけりたる平家の靈にわれは祈らむ  
 氣持よきわれと朝日に乗せにける船は江れり銀波の上を  
 秋草や青葉の色もうすらぎて日毎紅葉となるが美し



くう／＼と鳩舎より聞ゆ鳩の聲未だ來ぬ冬の聲に似てをり  
 動物園の猿に菓子など與へつゝはしやぐ友らの楽しげの顔（長府にて）  
 學舎の庭も秋の氣満ち／＼てアカシヤの落葉日々に數ます  
 定期試験始まりたればアカシヤの下に本讀む友ども多し  
 傳書鳩とかゝはりも無く雀ども今日も遊べり鳩舎の前に

檀上 昌子

土田 康子

犬つれて家を出づれば稻ももう重たく頭を下けて居りけり  
 何氣なく小菊一輪取りにけり山道づたひの遠足の道  
 遠足の道すがら見る柿の實も楽しき秋を思はするなり  
 ふと見れば向ふの海に只一艘眞白き舟が通りて居たり  
 野つばらにすゝきがわづか五六本風にゆられて咲いて居りたり

鶴田 嘉鶴子

酒やめて一周年になりたりと父は笑ひぬ聲ほがらかに  
 一人して書よみ更ける秋の夜の無氣味なまでに物音もせず  
 別れきて早や三年となりにけり昔の友を未だ忘れず  
 勉強に疲れて窓より空見れば慈愛に満ちしその星の影  
 昨年の着物の揚を取りつゝも大きくなりぬと母は喜ぶ

戸 早 久子

たのしみは我が手に植ゑし草花の日ましに伸び行く姿見る時  
 我が植ゑしアネモネの芽の朝夕に伸び行く姿見るぞうれしき  
 空澄みて菊も盛りとなりにけり明治の佳節ことほぐがごと  
 青海に白波けたて我が船は唐戸日ざして進み行くなり  
 辭書を引く手を休むればかたはらの炭火くづれて夜は更けにけり



富田輝

新しき校舎に木の香たゞよひてわれを迎ふるサイレンの音  
霜踏みて學路いそぐ朝風に枯野はるかに駒のいなゝく  
むく／＼と昇る煙を見下して山路を急ぐ秋の夕暮  
二つ三つ残る熟柿に百舌の來て高音に破る曉の夢  
はじめの電車がよひに心浮き定期を出して見るぞ嬉しき

頓入富枝

水清き小川の縁に笠おきて菜つばを洗ふ人見ゆるかな  
春の日の小川を泳ぐ子めだかのはねかへる音靜かなりけり  
眞夜中にふと目覺むれば優しげに今亡き姉の面影うかぶ  
うす暗き頃より起きて裏庭を齒ブラシ使ひつゝそゞろ歩けり  
旅立ちて七日はすぎぬ健やかに歸り來ませとわれは祈れり

(四年修學旅行に旅立つ)

長澤雅子

新しき我が學舎の清けさを永久に守りて學び務めん  
新しき我が學舎に學び得る恵多きを神に謝すなり  
たどり行く道の傍飾りをる秋の草花とればにほへり  
兩わきの稻田の中にくる／＼とまはるかゞしの面白きかな  
母のため水を汲み／＼目をそらす友にもらひし草花の上

中村イトノ

村行けば何處の家も菊咲きて障子明るく秋晴れにけり  
妹の寝顔しみじみ見て居れば今日のいさかひ悲しくなれり  
榮えある檜舞臺で全力を盡して戦へ母校の爲に  
刈られ行く稻田の後に残されし案山子淋しく秋深み行く  
木の葉散る落葉の蔭のこほろぎの鳴く聲淋し秋の夕暮



生きるべく定められたる命なり苦しみを越え悲しみを越え  
 友の文短かかれどもあたゝかし心しづめて繰り返し讀む  
 何處までつゞいてゐるか白い道やせた小犬が走つて行くよ  
 滿洲の友達に書いたお便を今朝又少し書き添へました  
 何となく嬉しいことのあるやうな明るく遠い今朝の天空

中村スエ子

子供等の集ひ來れる杉垣にあはれ淋しき一輪の菊

中村ミサヲ

晩秋の谷間の水は清らかに紅葉をのせて流れ行くかな  
 紅葉の風にそよぎてはらりと落つるも淋し秋の夕暮  
 砂丘にて友の便りを開き見ぬ秋の落日の赤かりしかな  
 まゝごとのおかずにされし花々のあとにのこれり白菊の花

放課後の教室に來れば今朝挿ししコスモスの花しほれてありぬ  
 たのしみは夕飯の後妹に父の手紙を讀んでやる時  
 温室のガラスこはれしまゝにしてサボテンの鉢に埃かぶれり  
 人氣なき座敷に入ればほのかにも菊の匂へり夜半の靜けさ  
 窓ごしにまばゆい朝日の暖い秋の日曜の楽しいひとゝき

中村美知子

鍋山美佐子

蒼々と天空遠くうち澄めり木の葉返りの飛行機はるか  
 氷嚢を入れ替ふる音に夜は寒く灯もるゝ父の病室  
 病みつきし父の手首のいや細り看護づかれの母いとしかも  
 新葉を乾したる上に月射してかざりと落つる柿落葉かな  
 汽車すぎし驛のホームにほそとくと鳴く虫の音に聞き入りてゐき



雲遠く海のかなたに消え去りて我が日本に春は来れり（海上雲遠）  
 風無きにアカシヤの葉の散り行くを我あきすしてなつかしく見る  
 師のいます南の空を眺むれば月の光も淋しさを増す  
 泉水の面に落ちたる紅葉葉は波紋を残ししづみ行きたり  
 おそろひのカバンもそろへ勇み立ち我れ等も行かなむ修學旅行

西田 和子

西田 保子

秋の日は山よりあけぬほのふくと人影浮ぶ朝霧の町  
 秋深し梢に高き柿の實の朝日を受けて光る美し  
 朝霧の未だ晴れやらぬ野を行けば我が裾濡らす萩の白露  
 からたちの針のいけにへからしに乾いて寒い初冬の朝  
 秋眞晝落葉の音のすみわたり物思ふ私の胸の悲しき

榎塚 紀子

妹はゐないと言へどしけく来る近所の子等の愛らしきかな  
 のどかな日遊べる子等の聲きながら我讀書して一人留守居する  
 静かな夜我にかへつて筆おけば淋しき音楽微かにきこゆ  
 雨降りの關門海峡ながむれば深き霧の中を船は進みゆく  
 青海に眞晝の太陽かゝやきて更に青みて美しかりき

野中 康子

つゆながら折りにし草のその中に一きははゆる撫子の花  
 文机に向ひてあれば秋の風わが髪なぶる心地よさかな  
 白き花ほのかに咲きて夕とぼり静かにとざす秋のまどかな  
 一人ゐて友思ひをれば秋の日に小さき音して霧雨のふる  
 菊一枝手折らばやとて立寄れば露けかりけり九日の朝



東方に滿珠干珠かすみ見ゆ平氏の哀れはるかに思ふ  
霜月の冴えた朝庭眺むればのほり藤の芽鋭く光る

野村 文子

校庭のあかしやの木の葉は散りてすくよかな枝わびしくなりぬ  
風吹けばすゝきの穂等はさや／＼となびきかはして頬なでるなり  
戸上山登りて見れば關門の秋の景色に眺め入るかも

橋上 久子

新聞紙ひろぐるや否いち早く目につく文字はエチオピアかな  
眼を覺し外うかゞへばなほ暗し未だ早しとて眠るなりけり  
弟の寝顔つく／＼眺め入りうれしけに母は眼つむれり  
弟と夜汽車を見にと野べ來れば汽車があかしと手をたゞくなり  
汽車の窓外眺むればいや白く松の小枝に雲は降りつゝ

畑間 サカエ

こほろぎの鳴く音に我は勵まされ眠るを忘れ一心にする  
祭日の菊人形の人多し皆美しく飾りてあるよ  
露天風呂寒さ身にしむ月の夜獨り冷たく淋しく冴ゆる  
我が庭になりたる柿の初物を我は思はずほゝ蒸みて食む  
やんま取る群にまじりて弟の竹振りまはす秋の夕ぐれ

馬場 静子

校庭の隅に一本アカシヤの木今はさびしく我等見下す  
懐かしき亡き弟の繪姿に又も涙に咽ぶ此の頃  
月影に一人さびしくたゞすめば虫の音聞ゆ明るき月夜  
庭に出て廣き大空眺むれば星は一せいに我を見下す  
やう／＼に咲いたと思ふ菊の花人ら行きかふ度に觸れ行く



灰白くうすれ行く夕餉の煙にも深み行く秋の寂しきを知る  
 大空に高くそびゆるアカシヤの梢うら枯れて秋深みたり  
 壇之浦沈みし平氏を思ひつゝ青き海面に眺め入るなり  
 夜更けてラヂオの聲の冴え來ればお仕事の手はとだえ勝なり  
 懐しき此の學舎よ別れ行く我等の列に秋の陽の照る

久 恒 富 惠

新らしき校舎にうつりうれしさに友と二人で話にふける  
 お引越し種々様々の恰好も思ひ出話のたねになるでせう  
 とく起きて畑に出でゝ齒をみがく秋風寒く肌をさしゆく  
 新らしき校舎にうつり毎日を歩いて通ふ今日此頃よ  
 夜ふけてコチ／＼ひゞく時計の音なほ一段とさびしきをます

久 森 靖 子

大内山瑞雲こむるそのほとり今日玉の皇子生れ給へり  
 アカシヤは一人淋しく見下しぬ我等移轉の作業服姿  
 新しき校舎は良けれど懐しき高きアカシヤなきぞ淋しき  
 新しき塗板に白き字を書けば我が心持又落付けり  
 新しきクリーム色のカーテンに眞晝の光やはらかくさす

平 田 キ リ エ

灰色の海の遠くを走り行く船はかすかに見えかくれつゝ  
 夜々に蚊のうなりの音もほそくなり秋も次第に深くなりたり  
 幼き日本を讀み／＼米搗きし偉人のことが思ひしのぼる  
 秋の夜を思はせてるし蟲の音は細くなりたり風が吹きゐる  
 時折に出でゝ來る蚊のあはれなり秋も次第に更くるこの頃



移轉の日近づきたりとたのしげに語り合ひつゝ友と別るゝ  
 たのしみは姉より來たる手紙をば何事ならむと考へ見る時  
 しみじみとそゞろ向へば秋來つる机のつめたさ一しほつのも  
 夜起きて便所に行きて手を洗ふ水のつめたさ冬を思へり  
 落葉は掃き清めたる庭園に散りて吹かれて趣をそふ

深田 フジエ

福江 徹子

夕立に雞あまたかけこみてひしめきあへり小屋の狭きに  
 黄昏の畦道行けば路のべの稲田に蝗の群れ跳ぶ音す  
 夜更けて外面にひとり聞ゆるは風にざわめく青笹の音  
 橙の茂る向ふに青空の爽やかに見ゆ雨上るらし  
 たゞ一人淋しきまゝに物思ひ名もなき草をいじりて居りぬ

古江 俊子

歌心わき來ぬまゝのつれなゝにノートみだして人の名書くも  
 新しき萬年筆を買ひたればその夜は日記ながく書きたり  
 水害の跡ひからびし砂原に演習すみし兵休み居り  
 明日は雨とラヂオは言へど足立山を照して月の輝き出づる  
 避暑地を引上げる人つぎつぎて沖には白き浪高く立つ

堀田 修子

朝早く起きて障子をあげたればわが肌にあく風の涼しき  
 もうノゝと絶えず休まず吐く煙わが小倉市の誇なりけり  
 夕暮の淋しき道をすぎゆけば怖さのあまりあとふりかへる  
 コスモスの花咲き匂ふ門口に今日も靜かにそよ風吹けり  
 眞青なる空高々と澄める日よ登校の道の氣持よきかな



そよ／＼と秋風吹ける田圃道何を語らんと倚りし雀なるか  
朝起きて両手伸ばす其の身にも秋が来しとて教へ居るかな  
春は春秋は秋とて花が咲く今も美しく咲き居るダリヤかな  
何時見ても人で一ぱい水道端今は唯淋しくコップさがりける  
兵隊さん兵隊さんと云へる子も御國の爲の兵士にあらずや

堀部 八重子

松田 和子

裏庭のコスモスの花咲きたれば一枝をとりてみ佛に捧ぐ  
うれしきは關門海峡をわたるとき頬にかゝりし白きしぶきよ  
男子らは朝とく起きてお祭の太鼓たゞきに夢中なりけり  
夜廻りの拍子木の音も淋しけに未だも歌の作れざるかな  
やう／＼に朝冷えゆけば何時となく燕の姿見えすなりたり

松永 和子

校庭のアカシヤの木は淋しけに春の來るのをまちてゐるかな  
お茶の口にお饅頭をいたゞいて控室にてさはぎ出すかな  
雨の日に石の上にて妹はころりころりところび出すかな  
冬空にとりのこされしとんほ等は淋しさうにもとんでゐるかな  
新しい學校に行きなんとなくうれしく思ふ我等の心

皆吉 美恵子

何處にて遊び居らん弟の争ひ出でし後のさびしき  
アカシヤの葉もちりはて、校庭に木枯荒ぶ冬となりけり  
移り來て早や一月は過せどもまだなれきらぬ我家なりけり  
赤坊がお出でをしたと家中が喜びさわぐ和やかさかな  
我が妹いもの病なほりし嬉しさに佛の前にぬかづきにけり



新築の校舎に入ればほのかなる木の香にほひて心をどりぬ

遠足の土産を待ちて我が家のかどべに立てる弟等見ゆ

秋の夜に疲れし母の肩もめば庭に虫の音悲しかりけり

青空に高くそびゆるアカシヤの梢に赤く夕日は照れり

陽を浴びて赤く映えたるアカシヤの葉にわびしくも秋の風吹く

久しぶりに母校の庭に立ちよれば通ひし時の頃ぞなつかし

何気なく見上ぐる空に日の丸の旗ひるがへる秋の晝すぎ

暑き日は涼しきかけを投げかけしアカシヤの木よたゞになつかし

晩秋の梢寂しきアカシヤに思ひ出さるゝ過ぎし一年

瑠璃色に晴れ渡りたる大空をたのしげに見る遠足の朝

支那蕎麥のチャルメラの音の響き行き淋しく夜は更けて行くなり

かりそめの御いたつきと思ひしに師の君未だ學舎に來まさず

師の君の御健やかなる御姿に逢ひまつる日をひたすらに待つ

色あせた落葉重なる庭先にましろき霜は今朝も降りたり

霜月の寒き夜空に凄きほど冷き月はひとり冴えたり

乃木神社詣で、見ればかしこさに自づと頭さがるなりけり

古へにありし事をば偲びつゝ靜かに頭は下りゆくなり

嬉しきは遠き友より時折にお便來り開き讀むとき

朝起きて庭の雨戸をくり行けば菊の香りは満ち満ちてをり

秋空につらなる雲をみてをれば菊の香の匂ひくるかな



室住千枝子

我が好む歌詞をノートに書きつらね日毎開きて心たのしむ  
 そのかみの小さき日記出して見ぬ幼き頃のなつかしきまゝ  
 かゝる日のかゝる月夜に我が父はまるき心を持ってとのたまひき  
 なつかしきユーカリの葉はゆらぎたり思ひ出草の茂るかなたに  
 お人形壁掛などをかけて見ぬ覺がへせし新しき部屋

八百喜業子

新しき障子にうつる紅葉影あざやかにして心やすけし  
 もみぢ葉にすきとほりたる赤き陽をあびてたゝすむこゝちよき晝  
 こすもすのさやかにゆるゝ葉影よりやさしき友の笑みのぞきけり  
 秋晴れに縁に坐りて爪をつむはさみの音はあたりにひゞきぬ  
 病む母に代りて活けし床の間の女郎花にぞ秋偲ばるゝ

山内富美子

送られし歌のかすゞくりかへし病める我が身のたのしみとする  
 見渡せば森の若葉のとりゝにみどり色なす初夏の頃  
 新しきわが校舎をば仰ぎ見てふるき校舎を思ふひとゝき  
 山ゆけば青き芽はえは伸々と暑きもしらぬ谷川のほとり  
 レコードに合せて我はうたひたり幼き時の事を思ひて

山岡道子

樂みは朝起き出でゝくしけつり髪の長さをはかり見る時  
 庭の隅ひとり淋しく咲きにけるコスモスの花ふと目にとまる  
 舟に乗り揺るゝを騒ぐ少女らの様のをかしき遠足の日よ  
 自習時間何か名歌が出来ぬかと考へをればサイレンの鳴る  
 新築の香なつかし我校舎朝露ふみて足もかるやか



裏庭に母に叱られ物思ふわれを秋風吹きすぎてゆく  
 校庭にアカシヤの葉のちら／＼と物淋しけに散りて知る秋  
 菊の香のほのかに香ふ講堂に式嚴かな明治節かな  
 秋の日に日章旗舞ふ町中を我は勇んで歩きゆくなり  
 秋の日にとりのこされし葉雞頭物わびしけに立ちてゐるかな

山口 米子

山田 淑子

昨夜の雨晴れてすがしき裏庭やしづくしたゝるダリヤ揺れ居り  
 とり／＼のダリヤを折りて瓶にさせど香の無きは寂しかりけり  
 母様のやみつかれたる顔の色そゝる涙が頬を傳へり  
 草影にひとつ淋しく咲き香ふ眞白き菊の一輪の花  
 夜一人湯にひとりつゝこほろぎの淋しき聲に耳をかたむく

芳崎 和子

暮れ行ける秋の淋しさ思ひつ々唯ひゞきくる蟲の聲かな  
 雨上り朝早くより散歩して子供相手に遊び戯る  
 今日こそは待ちに待ちたる日曜日皆連れ立ちて山へ行かなん  
 菊の花の高き香をかぎながらさらば別れん舊き校舎よ  
 菊の香の高く匂へる舊校舎明日よりこゝに通ふ事なし

吉田 美奈子

アカシヤの散り来る廣き校庭にさゞめきあひて遊ぶ少女等  
 帆柱の聳ゆる峯に光浴びてひら／＼と舞ふ日の丸の旗  
 大空に高く聳ゆる足立山行く道々にせゝらぎの音  
 菊の花優しく咲きてかど／＼しき私の心をさとしやわらぐ  
 新校舎をめぐる山々紅葉して八百の我等を悦び迎ふ



吉元ナミ子

まちたれどいまだに船のおそかりしことは我胸じらしたるかな  
 たのしみは早く起き出で井戸水に顔つゝこみてあらひたる時  
 學校をさりし人をば思ひ出し道にてあひし時のうれしさ

秋の夜のみそらの星のかゝやきは他國の父を偲ばするかな  
 秋風が吹いて秋をば感じたり袖に白露なほおかねども

吉本ミツ子

自習時間足音すれば一時のみしづまる後はにぎはひにけり  
 何時しかに闇となりぬるさ庭べに涼みてあれば流星見ゆ  
 見えねども闇の彼方は波止場なり今し人らむドラの聞ゆる  
 寝ぐるしき今宵も袂おしのけて何を夢見るあどけなき子よ  
 商店街ショーウインドの呉服物色濃くなりて秋深みゆく

渡部都子

秋日和友とかたらふ楽しさにあゆみもかろし遠足の日よ  
 こそノゝとさゝやく聲もなんとなく小さく低くあたりにもれず  
 あれもしてこれもしようと思へどもとゝのふ仕事出来ぬ悲しさ  
 紅葉した落葉の音もひそやかに暮れ行く秋のまのあたり見ゆ  
 軒下のかゝやき光る太陽にいとはずはけむくもの行きかふ



—  
年  
集



牧野ハル

人通りもすくなになりぬ宵の灯に雨の舗道は輝きてあり  
夢さめてひとり思ひに沈む時こほろぎの音のかなしくもあるかな

妹の顔も交れり横丁の紙芝居の前の小さき人だから

何かなしものに追はるゝ心地して書を開けり日曜の宵

哀れヒロ病重りてひねもすを古き乳母車の中にいねけり(病犬ヒロ)

松中佐代子

夕暮のすゝきそよける秋の野に一きは高く蟲の鳴きける

我が庭の垣根に咲きしコスモスのひとひら散りぬ秋の夕暮

さや／＼とすゝきそよける黄昏の家路を急ぐ里の子供等

去りゆきし友を偲びて今日もまたひとり濱邊をさまよふ我は

コスモスの葉かけにすだく蟲の音もかすかになりて秋深みゆく



枯枝に二つ三つなる柿の實が時々動く秋の暮かな  
 空澄みて菊の姿の美しきこの秋の日の静かなるかな  
 朝見ればほし忘れたる我が下駄のしと／＼雨にぬれてをるなり  
 我が帽子木枝にほせば赤とんほ静かに止まる夏の夕ぐれ

増山 愛

藤谷 悦子

朝夕にめでつゝ培ひし菊の花今は美しく咲きそろひけり  
 菊の花一枝折りてなき祖父のみ佛の前に供へたりけり  
 裏庭の無花果畑に葉は散りて日毎日毎に秋深み行く  
 淋しくも花みな散りぬコスモスの一つ一つに秋ふかみ行く  
 小春日を我兄君はほがらかに釣竿持ちて家を出でにき

志賀 倭文子

ふきあけし朝の板縁輝きてガラス戸の影さやかにうつれり  
 夜の部屋に心静かに書よめば床の黄菊の香たゞよふ  
 明けやらぬ街の朝霧たちこめて星の如くに灯影またたく  
 細長き湯屋の煙突細々と煙をはける秋の夕ぐれ  
 はら／＼とわくらばちりて池の上浮きて動かす秋のたそがれ

小川 淑子

荷車を籠にすてゝあへぎつつ登る山路に松風の音

辻 文子

いつもくるこの古寺は静かなり廣き庭にも塵を見とめず  
 松林の茶席に坐せば遠潮の鳴りのひそけき秋の日の午後



さや／＼と薄そよける平原のはるかかなたに秋の夕月

深田 ヨシノ

谷川をいかだに乗りて紅葉狩空より落つる紅の一葉

吉村 朋子

卷 末 に

わが福岡縣小倉高等女學校喜久短歌會第三回目の歌集である本書は、職員六名、生徒二百六十一名の参加を得、歌數一千三百七十五首を収載してをり、人員に於ても、歌集に於ても前歌集と大差はないやうである。

今年、校舎がこの到津の地に新築されて、容易に遭遇すべくもない校舎移轉に遭遇し、本歌集の原稿を書いたり、整理したりしたのも、その直後の最も多忙を極めた時期であつたために、精神的にも餘裕のないやうな状態にあつたにも拘らず、かく多數の参加者を得、第一歌集當初志した通り、健全な足どりを以て進んでゆく事實は、お互に喜びに耐へないところである。

新校舎に學ぶことの出来る喜びを喜ぶと共に各種の方面に一段の勉強をすべきこと申すまでもないことであるが、作歌の方面に於ても怠らずつとめたいものである。

因に、本歌集の原稿は、研究科を長澤教諭、四年を海老澤教諭、二年を北澤教諭、一年を徳永教諭が世話され、三年は主に私がその事に當つた。

昭和十年十二月二十一日



昭和十一年二月二十五日印刷  
昭和十一年二月二十八日發行

【非賣品】

編輯者 福岡縣小倉高等女學校

發行者 松 尾 恒 次

京都市下京區西洞院通七條南

印刷者 內外出版印刷株式會社

代表者 須磨勘兵衛

發行所 福岡縣小倉高等女學校喜久短歌會



終